

《研究ノート》

世界を横切つて人民戦線（四）

平 田 好 成

「中国で」自由を求めて立ちあがった若者たちを、暴力で弾圧するような政府に未来はない」

— 仏、ミッテラン大統領、世界で初めての論評、一九八九年六月四日 —

七

第七の論文は、マルコム・シルヴァーズ Malcolm SYLVERS（イタリア人、ヴェニス大学）『アメリカ合衆国、すなわち、人民戦線と大衆的組合員化』である。この論文は、五〇年振りで回想されている。

炭坑労働者たちの指導者、ジョン・ルイス John Lee Lewis は、ワグナー法が、労働者大衆について、一九三三—三四年でアメリカ復興局 N R A と同じ効果を持つことはできるであろう、事実をざっとつかんだ。これら二年の騒ぎは、空文になるままであった。アメリカ労働総同盟 A F L の指導者たちの無能の結果、一九三四年大会によって採択された産業的労働組合主義について、妥協の決議を薄らいだ。総同盟は、新しい状況に直面して、さもないとなお当時もつと有利に行動しなければならなかった、総同盟は、もう一度例外的機会を通過させることはできるであろう。それは、これらの確信でもって、そして幾つかの清算するような意思でもって、実は、ルイスは、一九三五年一〇月でアメリカ労働総同盟

の大会から大西洋都市（ニューリジャージ）まで赴いた。明確なやり方で、産業的型の労働者たちの大衆を組織するのに、総同盟を強制する一つの決議は、単に四〇%の票を集めた。もう一度、職業の諸労働組合は、これらの新しい基礎について組織された労働者たちの大量の殺到によって、氾濫して見受けられるように恐れた。投票後、ルイスは、大工たちの労働組合の議長及び職業別労働組合主義の最も決然たる、そして納得させた支持者たちの一人、ウィリアム・ハチンソン・William Hutchinson によつてげんこつでなぐり合つた。すなわち、それは、アメリカ労働総同盟の内部に骨折の面目を引く、そして—マスコミメディアによつて最も広く放送された—徴候であつた。次の朝、—すでに現行の諸産業労働組合から来る大部分—ヒルマン Hillman と少数派決議の他の著者たちと一緒に、ルイスは、彼がアメリカ労働総同盟の内部に再編成を作つた、産業別労働組合会議 C I O を創設した。一年自体において、これらの労働組合は、センタールから中断されたように見受けられた、次いで、『平行する』労働組合主義の古い非難の下に、すなわち、世界産業労働者組合 I W W に反対して、次いで労働組合教育連盟 T. U. E. L. に反対して使用された、非難の下に、一九三六年の大会に対して追放されたように見受けられた。ルイスは、すでに一九二〇年代に彼の考えを述べた。すなわち、彼は、諸労働組合と資本の間、協力で信じたし、彼は、同様に、人々が、科学技術の進歩の前に妨害で組み立てる義務がなかつたらしいと思つた。しかし、彼のために、組合員化と政府の介入は、労働者の条件を保護するため、そして、その賃金が、一般的に言つて経済を釣合わせるため保証されたように、高い賃金を保証するため、必要となつた。ルイスは、同様に、労働者たちが何らかの方法で、産業の方向に参加するような権利を持つ義務があつたらしいと思つた。彼が、イデオロギー的にあるいは政治的に左翼ではなかつたのに—過去において、彼は、共和党を支持したし、彼は、それ自身として権力の行使を愛した—、彼の機会を通過させないような希望は、たとえルイスが、共産党員たちを、公式に彼の労働組合の門を閉じたにしても、単に戦闘的ばかりでなく、なお率直に共産党員たちを含めて、政治的左翼の方に向けられた路線を、希望に、従うことを余儀なくさせた。

産業別労働組合会議は、その前の三年で形成された、そして、他の可能性は存在しなかったから、アメリカ労働総同盟で加入された、直ちに労働組合の諸集団を集合し、及び発展し始めた。センターの指導者たちの内気さによつて失望された、これらの労働組合は、かなり急速に産業別労働組合会議の陣営の中に入った。一九三六年春で、アメリカラジオ製造会社 R C A の電気機械労働者たちのスト、そしてもっとなお、座り込みストの運動、工場占拠が、始まった。アクロン（オハイオ）で、その気体の部門でグッドイアーに反対して指導されたストは、意義深いものであった。しかし、最も重要な試験は、非常に特にルイスにとつて重要であった、製鉄業産業において現われる義務があつた。その理由は、これらの独占企業は、独占企業が、常に全米炭鉱労働者組合（最も戦闘的な組合）U M W を遠ざけることに成功した、彼らの固有な石炭鉱山を持っていた。鋼鉄のお偉方たちを従わせることは、同様に炭坑労働者たちの組合員化を広げるような可能性を引き起こした。

一九三六年の春で、製鉄労働者組織委員会、S W O C が形成された。すなわち、この委員会は、下部組織の運動から出現しなかつたし、委員会は、序列を付けられた構造を持っていた。しかし、製鉄労働者組織委員会の組織者たちの間、多数の左翼人たちは存在していた。すなわち、半非法法のやり方で、諸工場が分散した、約一〇の州において、諸集会を召集するため、色々な民族の共同体の結社及び宗教的グループ、そして黒人諸組織と連絡を取るため、往復していた、左翼人たちは、びらを配達した左翼人たちは、加入者証明書で署名させた、そして工場の会報を出版した。ルイスは、その上に、彼の組織において、なお古い製鉄業の労働組合から残っていた、一九世紀の終わりで狼狽させた、問題を引き付けることに成功した。

もしも、こんなわけで事を行いながら、産業別労働組合会議が、いささかセンターと彼の論争において身を守つたならば、ルイスは、この勇壮活発な闘争において彼らの不十分な存在のため、頑固な批判の彼の指導者たちを免れさせなかつた。アメリカ人が、慣れ始めた、彼の飾り立てた言語において、ルイスは、『製鉄業者たちが、谷において、産業戦争の

埃と苦しみの中で闘った間、丘について、テントの下に婦人たちと坐ったままである』ことで、責任者グリーン Green を告発した。

とりわけ、製鋼工場における闘争から見れば、実は、ルイス、産業別労働組合会議と議長の間の同盟は、鍛えられた。すなわち、非雇用労働者連盟、N.P.L.は、全国的レヴェルと同様に地方レヴェルも、ローズヴェルトのニューディール（新規蒔き直し）の支持者を保証するため、形成された。民主党と形成中のこの産業の労働組合主義の同盟は、重く第三政党の創設の欠如に重きをなした。物価のため、ルイスは、産業別労働組合会議の闘争に対して政府の支持と同様に要求した。すなわち、そしてそこでこの時期で、多少とも、この支持は、当時実際に与えられた。後で、— 事実次の年から—、ルイスは、ニューディールに対して彼の無条件な支持者を関係した、問題について良心にとがめられるであろう、しかし今や手遅れであろう。すなわち、民主党員たちと関係は、急速に左翼の労働組合の政策の軸になったであろう。

一九三六年一月の国政選挙の数カ月で、政治的状況は、左翼にとって非常に開放的らしく思われた。すなわち、諸事実において、上昇の、顛覆の運動は、アメリカの舞台を支配した。人間たち、思想及び諸組織は、集団的に労働者たち及び農民たちの第三政党の方向に集まった。そのモデルは、多少とも、イギリスの労働党の政策のモデルであった。そのイデオロギー的な形態は、正確ではなかった、しかし人々は、モデルが、公然と自分が社会党员であると表明したであろうということ考えた。モデルは、諸改良及びエネルギーの部門のような諸部門の国有化のため、資本の支配に反対して向けられた現実の独立した及び民衆の圧力を、いずれにしても、代表したであろう。モデルは、彼の発展にもかかわらず、ローズヴェルトについて当てにすることはできなかった。人々は、普通に、左翼界において、—そして革命家と考えた、左翼にばかりではない—、大統領が、民衆の利害のため信頼できない支持者を表明したということ考えた。その理由は、大統領は、彼の最も保守的な諸部門を追放しないで、あらゆる民主党に余りにも結び付けられた。その上に、人々は、喜んで、もしも人々が、決して第三の政党を構成しなかったならば、大衆は、その人気を、当時増大するように進化した、

色々なデマゴグたちの多様性を従うことに導かれることはできたということをも、評価した。従つて、この第三政党を考慮して、ミネソタの連邦土地銀行FLB、 Wisconsinの進歩主義者たち、カリフォルニアの経済計画産業委員会EPIC、この州の民主党が規制した、ワシントン共和国連盟は、明確になった。すなわち、それらの利害は、同様に経営農民たちの結社、ニューヨーク市長、ラীগアルディアLa Guardia及び幾つかの他の政治家たちを表明した。ある場所において、一九三四年と一九三五年の国政選挙で、アメリカ労働総同盟の地方当局によつて時折同時に支持された、労働者たちの党は、立候補した。国民誌、新共和国誌と常識誌のように、無視できない普及の左翼の諸雑誌は、なおこの創設に対して興味を抱いた。もしも、人々が、正確なやり方で、これらの色々な分派を特徴づけることを希望したならば、疑いもなく、人々は、諸分派が、一八九六年でブライアン Bryan の及び一九二四年でラィフォレット La Follette の、似通つた（アメリカ）民主党から民主党まで実現された説明を構成したということを言った。すなわち、本質的な構成要素が、当時運動中の産業労働者たちに戻る義務があつたということを言うため、皆は、全員一致であつただから、実現された説明。さて、二つの要となるものは、創設している最中の産業別労働組合会議とローズヴェルトであつた。すなわち、そして、労働者たちの間、確認された、同盟は、労働者たちの独立の運動の中に、諸希望の目的を意味した。すなわち、一九三六年五月で、従つて、第三政党の形成に興味を抱いた諸勢力の会議は、失敗した。産業別労働組合会議の指導者たちは、すでに、ローズヴェルト及び民主党を考慮して、彼らの選択を作つた。

ローズヴェルトと労働者たちの間の同盟は、しかしすべての上に建てられなかつた。すなわち、国政選挙を先行した、数カ月中に、二つの大政党の態度の諸変更は、社会的諸闘争に対して位置づけられることは問題であつた時、ますます明白になつた。それは、大統領が、彼は「貪欲な人々から取り除いた陣営の憎しみ」、すなわち、彼は、彼が喜んで憎しみを迎えたことを付け加えた、憎しみを「招き」寄せたことを言った時、空の修辞ではなかつた。すなわち、あるいは、『アメリカの諸制度に対するわれわれの誠実は、われわれをかかゝる権力を顛覆することに義務を課する』ことを付け加えるさ

え、大統領は、『政府について君主たちの規制によって、新しい専制主義を配置した、新しい経済的な諸王朝で特権を有した君主たち』について話した時。事実、修辭の綱領は、この方向の中に進行するように思われたし、一九三五年の諸措置に対して、諸労働組合に反対してストの破壊者たちの利用に反対する法律及び間もなく現行の平均賃金を企業の労働者たちに支払わせることに、重要な政府の諸注文で恩恵を浴する諸企業を義務を課した、他の法律は、間もなく付け加わった。

その上に、大統領の同意によって、ロバート・ラッフォレット・ジュニア Robert La Follette junior (一九二四年の立候補者の息子) によって指導された及び経営者、すなわち、私的な警察の、スパイ、等の利用によって基本法の諸違反を検討するように委託された、上院委員会は、形作られた。この委員会は、製鉄労働者組織委員会が、根を降ろすことを試した諸地方において、正確に委員会のアンケートを行った。

その配置のため、鋼鉄の労働組合は、単に現存の企業の諸労働組合にばかりでなく、その組織者たちが、製鉄労働者組織委員会の友人として指示した、ローズヴェルトの威厳にも基づいた。その友人は、労働者たちに対して、大統領に賛成投票するように忠告したように論理的であった。友人は、共和党の立候補者、ランドン・ランダムに反対して、しかし同様にアメリカ自由連盟、ハースト Hearst 及び鋼鉄の大立て者たちに反対して投票の意味を与えた、投票。疑いもなく、政治的及び社会的雰囲気は、階級的諸闘争によって強くマークされた諸印象を發表した。すなわち、それは、ハーヴァードの三〇〇年のお祭りの機会に演説を述べる、その時ローズヴェルトのこの偶発事は、ブルジョワの学生たちによって口笛を吹いたように見られたことは、単に雑報ではなかった。政治的左翼においてさえ、当時非常にひとりならずの意外のつまらないことは、民主党それ自体が、第三政党になる最中でないかどうか自問し始めた。

そのように、一月で、目醒ましい勝利の方にローズヴェルトをもたらした、大きな同盟は、生まれた。大統領は、決してそのようなものとして実業界を非難しなかった。そして、民主党それ自体の内部に、幾つかの大都市の支持者の構造

及び南部の地方的エリートたちは、決して問題に再検討されなかった。しかし、主な民族の集団たち及び黒人たちで、小農民たちで、自由の及び左翼の知識人たちで、労働者たち及び彼らの諸組織で幅を広げた影響力は、ローズヴェルト及び彼の党のため、重要な転換点を意味した。優先権を持つて支配する経済的な諸集団に答える代わりに、この時期のニュー・ディールは、経済的権力を自由にしなかった、大衆の中に選挙的及び社会的連合体を建設した。

一九三六年の国政選挙で、大きな同盟の重大な気掛かりは、資本の影響力と同一視された、共和党の影響力から来なかった。しかし、その気掛かりは、長らく前から左翼の諸議論を活気づけた、しかし政党から異なった、第三の政党の介入によって引き起こされた。連合党は、右翼のデマゴーグたち、クーラン Coughlin 牧師及び一九三五年で暗殺されたロング Long の後継者となった、ジェラルド・L・K・スミス Gerald L. K. Smith を再編成した。連合党は、その上狭くタウンセンドと同盟を結んだ。そして、連合党は、党の立候補者として、ミッドウエストの共和党の議員、ウィリアム・レンムク William Lenke を指名した。党の綱領は、同時にウォールストリート、共産主義、諸課税及び諸輸入に反対して罵倒したし、社会的扶助の諸措置を褒めそやした。一般的に言つて、アピールの口調は、感傷的なままであった。諸演説は、しばしば反ユダヤ主義によって横切られた、曖昧のままであった。レンムクが、過去において、労働者たち及び農耕者たちを防衛するため、何度も繰り返して、戦った、事実は、この第三の政党が、ファシスト従属関係である義務があった、左翼に対して、一般の印象を妨げなかった。ローズヴェルトを支持しないことは、従つて共和党員たち、あるいは、なおもつと悪く、レンムクの後ろに集まつた諸勢力を力づけることを意味したのである。

その数が、八〇〇万から九〇〇万のレヴェルでなお留まつていた、失業者たちにもかかわらず、そして出版の多数派が、大統領に反対した、事実にもかかわらず、諸結果は、予期せぬ出来事を大いに関係があつた。すなわち、ローズヴェルトは、メイン州とヴェルモント州を除いて、全アメリカ史の最も強い多数派（投票者たちの六一％）でもつて、全州で勝つた。レンムクは、一〇〇万以下の票を集めた。社会黨員たち、二二〇万以下。（主敵が、共和党の立候補者、アルフレッド

II ランドン Alfred Landon であったということを言いながら、間接的に大統領を支持した。共和党員たちは、八万票を獲得した。さて、ローズヴェルトの得票結果は、共和党員たちが、分配を確認したように、失業者たちにとって仕事の分配に割り当てられ得なかつた。

ある側面によつて、ルイスとヒルマンは、たとえアメリカ合衆国が、明確に現存の政党の方に向けられた、それに対して今度、恒久的な構造を利用したとはいへ、人々が、友人たちを報いるし、敵たちを罰することを希望した、アメリカ合衆国の労働組合史の伝統的な政策を従つた。産業別労働組合会議のため、諸大政党が、友人たちと敵たちの間に分配された、やり方について、何の疑う余地がなかつた。未雇用労働者連盟の約束は、諸結果から例外的になつたし、従つた。すなわち、産業諸地方で、ローズヴェルトに対して有利な多数派は、七〇／八〇%を到達した。労働者たちの大衆は、人々が、年の初めにアクロンのストで約束を確認できるように、彼の指導者たちよりもっと左翼にいなかった。ストのピケの線に沿つて、グッドイヤーの倉庫の前に、労働者たちは、夜の間寒気から保護されるため、バラックを建築した。すなわち、『ジョン・H・リールイス・キャンペーン』、『ワグナー上院議員キャンペーン』、『ローズヴェルト・キャンペーン』という諸掲示は、バラックに固定されて見られることはできた。

非常に印象的な彼の勝利にもかかわらず、ローズヴェルトは、その後で年で、敵対的な議会によつて及び彼の人気の敏感な衰退によつて、彼の飛躍に止まつた。一九三七年は、従つて批判された。すなわち、産業別労働組合会議の影響が、その最大限に到達したのに、新しい不景気は始まつた。対外政策は、注意を制止し及び大きな同盟の諸勢力を分割し始めた。大統領は、ニュー・ディールに反対してもたらされた諸判決のレコードの数を与えた。最高裁判所の職員において諸変化を作るように希望した。大統領は、そこで彼の最初の敗北を出合つた。かかる草案に対する議会の抵抗は、行政府の強化の恐れから生じた。そして多分、ローズヴェルトの再選の準国民投票の諸条件は、この恐れにおいて出演した。効果の手段として提出された及び政治的戦闘の緊急によつて誘発された手段として提出されなかつた、最高裁判所の再組織の計

画は、どうか世論を動員し遂げなかった。すなわち、常にアメリカ労働総同盟と産業別労働組合会議の間の増大する論争が、疑いもなく諸労働組合の側のもつとゆつたりした約束を妨げたことを、人々は、付け加えるさえてできる。その上に、諸労働者闘争の深化、及びとりわけ一九三七年の諸工場占拠は、―諸工場占拠を励ましたことを告発した―ローズヴェルトを火に油を注がないように導いた。要するに、四月で、裁判所は、―恐らく大統領の攻勢によつて係わられた―、ワグナー法の合憲性を宣告したし、従つてその固有なイメージを改良するのを貢献した。ローズヴェルトのためらいは、当時前よりもっと激しく活気づいた。その議員たちが、自身同様に強い多数派でもつて再選された事実から当然、主張する、民主党員の議員たちは、ますます大統領に関して議員たちの独立を表明したのに。それは、黒人たちを考慮して私権の諸問題について及び社会的綱領の拡張の問題について、北部の民主党員たちと南部の民主党員たちの間の分裂の出現を許した。そのように、最小限の賃金及び最大限の時間割についての法律、他の諸地方に対してテネシー川流域開発公社 TVA の経験を拡張するのに当てられた他の法律は、通過させることはできなかった。連邦の犯罪を解雇で作ることを目指した、法律の提案は、もはや通過させなかつた。連邦の犯罪は、他の諸問題について南部の上院議員たちと下院議員たちの投票を両立することを必要とした、ローズヴェルトに対して優先権ではなかつたことは、真実である。人々は、和らげる説明において、住宅建築について法律及び貸付け金の内部の改良のためにせよ、州の財産、すなわち、土地の購入のためにせよ、小作人たち及び分益小作人たちに対して貸付け金を作ることを資格を与えられた農業安定局 F S A を創設した、法律を通過させた。^(一)

一九三七年の終わり頃始まつた、不景気は、一部分は政府の経済政策によつて引き起こされた。すなわち、保守派たちの影響の下に、ローズヴェルトは、物価と賃金のいたちごっこを規制するため及び投機に基礎を置かれた回復を凍結するため、支払いの秤を安定させるように試みた。ローズヴェルトは、同様にこのやり方で、ニューディールの最後の発展によつて尻込みさせられた、企業長たちをそんなにひどく恐れられた解消を避けるように、実業界の方向に一步を踏み出す

ことはできると考えた。不景気の激化の前にして、大統領は、しかし、公の費用の回復の観点から及び独占企業が、経済を窒息させたと評価した、独占企業に反対して—少なくとも言葉で—小さな攻勢によって、経済を推進させるように試みた。すなわち、人々は、事実経済について集中の効果を研究するのに当てられた委員会を任命した。従って、もう一度余計に、実用主義の名前で、ローズヴェルトは、政治的推進に到達するため、異なった諸方向に取り掛かる準備のできた、よく定義された行動の線なしで見出されたことは、明白であった。民衆界において、彼の人気の衰退は、主に新しい恐慌の初めで、急速な介入の欠如に義務があった。

同じ時間において、産業別労働組合会議は、前進を続けたし、たとえ産業別労働組合会議が、全国的政策の中心的勢力になるのに成功しなかったにしても、とりわけ諸階級の直接的な諸紛争の場合に、多数の成功を記録した。一九三六一—一九三七年のスト参加者たちは、大部分は自然発生的なやり方で行動した。しかし、スト参加者たちは、産業別労働組合会議の接触を探し求めたし、すでに『政治化された』幾らかのミリタンたちによって、前に創設された下部の諸組織を利用した。この時期において、『産業別労働組合会議、前進させよ』というスローガンにおいて要約された、労働者の闘士的活動の響きが、反響を呼んだ時、ルイスは、大きな重さの全国的像として現われ出るのを目指したし、それは鋼鉄の、自動車及びタイヤの諸部門において、最も重要な諸交渉を導いた、ルイスであった。

まったく同様に、一九三六年で、オハイオ、ペンシルヴァニア及びミシガンのような各州において、ニ、ユ、テ、イ、ルに有利な幾つかの州知事たちの選挙は、重要であった。この最後の州において、フランク・マーフィー Frank Murphy の態度は、一九三六年の終わりまで、フリントでゼネラル・モーターズを占拠した、労働者たちの勝利において決定的であった。マーフィーは、ゼネラル・モーターズを、暖房を切るように及び工場の占拠者たちの食糧に補給を凍結するように妨げた。そして、企業が、地方の裁判官から、占拠された財産を立ち退かせるため、命令を手に入れた時、マーフィーは、一瞬ためらった、次いで、警備隊の介入を命令するように拒否した。マーフィーは、従って真の血の風呂を避けた。その理由は、退

去のため固定させた最後通牒が、期限が切れた時に、労働者たちは、連帯の名で、アクロン、ランシング、トレド、ポンティアク及びデトロイトの隣りの諸都市から来る、フリントで一団となつて進んだ。ゼネラル・モーターズは、たとえそれらの建物が、なお労働者たちの手の中にあつたにしても（たとえ建物が、革命的意図で持たなかつたにしても）、諸交渉を開くように余儀なくさせた。そして、ストは、若い労働組合、合同自動車労働者組合UAWの勝利に終わった。ミッドウエスタの産業都市において、諸労働組合と経営者の間、相違を克服するのを試みた、しかし積極的に労働者の圧力を記録した、連邦の政府でもつて、一カ月半を続いたこのドラマは、政治的状況が、非常に流動的であつた、証明であつた。証明は、同様にどれだけ啓蒙な資本主義の名で行動する、ニューディールにおいて、労働者たちの総合の単なる道具を見る、史料編集の解釈のこの傾向は、大雑把であるかということを証明した。

諸勢力の關係及び諸結果は、USステール（部門の最大の独占企業）を指導した、ミロン・テイラー Myron Taylor が、事実見識ある方法に従つて行動した、製鉄業の部門において同じ關係等ではなかつた。丁寧な全国的政策の経過を検討した後、この将来は、ヴァティカンの側にローズヴェルトで代表して、黄色の労働組合の崩壊及び回復の時期におけるストの費用は、たとえ製鉄労働者組織委員会が、力の立場になかつたにしても、労働組合と協定を署名するように決定した。そのように、製鉄業の産業において全国的ストは、避けられた。しかし、その結果は、同様に製鉄労働者組織委員会の内部に指導部の重さの激化であつた。

部門の他の諸企業の大部分において、決定は、逆に、トム・ガードラー Tom Gardler の指導の下に、抵抗するのに捕らえられた。財政の専門家であり、産業界の外部から来た、テイラーの反対に多くの局面によつて、ガードラーは、常に諸労働組合を戦つた。そして、彼のやり方で、彼は、『信条の人間』となつた。すなわち、彼の自叙伝において、これらの幾つかの年月の労働者の嵐を解説する、ガードラーは、『経営者が、もはや経営者ではなかつた』ことを単純に説明する。紛争は、非常に辛かつたし、一九三七年五月末の労働組合のデモの場合に、シカゴの警察は、砲火を開いたし、

一〇人の労働者たちを射ち殺した。製鉄労働者組織委員会は、敗北した—U、S、S、T、E、E、I、L、に加入しない製鉄業の諸企業における組織員化は、単に戦争の間に生じた—、そして、彼の右翼について攻撃された、ローズヴェルトは、経営者と同様に労働者たちを非難した。完全に産業戦争の挑戦を受け入れる用意のできていくように印象を与えた、ジョン・H・ルイスのため、それは、大統領と彼の分裂の初めであった。すなわち、労働組合の指導者にとって、ローズヴェルトは、常に、産業別労働組合会議によってもたらされた支持の価格を支払う必要があった及び彼によれば、白地小切手の署名であり得ないであろうということを、思い出す義務があった。一九三七年は、産業別労働組合会議に対して新しい諸加入を記録した。すなわち、事務員たちとサラリーマンたちと同様に、海の、木材の、アルミニウムの、靴屋の、交通機関の労働者たち。労働者たちは、古くはアメリカ労働総同盟に対して結び付けられた諸集団から来たし、企業の諸労働組合で編成したし、あるいは完全に新しい諸組織であった。産業別労働組合会議は、同様に、分益小作人たちと小作人たちの労働組合、労働小作農組合STFUが、一つになった、農業労働者たちと食糧労働者たちの統一された労働組合を形作られた。それは、しかし制限された成功を知るように労働組合を妨げなかった。アメリカの労働者同盟は、彼の側で、公の諸企業において働いた失業者たちと同様に、失業者たちを組織した。その同盟は、二つのセンターで協力するのを試みた。すなわち、その同盟が、共産党員たちと社会党員たちによって指導されたことによって、その同盟の好感は、むしろ産業別労働組合会議に対して進行したということに驚くべきではない。政府が救助を組織するため、その同盟は、とりわけ政府を圧すことに愛着を覚えた。

産業別労働組合会議の形成は、運命の皮肉によって、たとえそれは、後ろに残らないためであろうと、アメリカ労働総同盟を産業労働組合主義の戦術を採択するのに到らしめた。センターは、多数の経営者たちが、はるかに余りに急進的な、産業別労働組合会議とむしろアメリカ労働総同盟と、彼らの好みで取り扱うより好んだ事実から当然、利用する、戦争の初めての年月において重要な発展を知った。アメリカ労働総同盟は、その上に国際婦人服労働者組合ILGWUの再加入

の恩恵を浴した。裁判所の多数の紛争は、——誰を組織するように権利を持っていた？——労働組合の諸組織の間に勃発したし、紛争は、もつと静かな産業諸関係を推進するため再統一を希望した。ローズヴェルトとベルキンズ Perkins の努力にもかかわらず、再統一を妨げた。一九三八年で、産業組織委員会、その委員会のため、アメリカ労働総同盟を再統合するように問題になり得なかつたであろう事実から当然、銘記したし、その委員会は、労働組合の同盟として記録された。すなわち、産業別労働組合会議という略号は、留まつたし、その略号は、今後産業別労働組合会議という読まれる積りであつた。

その二〇〇万のスト参加者たちで、一九三七年で産業に係わつた、紛争は、先ず第一に、労働組合の承認を手に入れることを及び交渉に対して経営者を強制することを狙つた。労働のリズムの増加は、確かに広く、労働者の圧力を刺激したし、約一〇〇の占拠は、最も多様な企業の中に突如姿を現わした。そして、しかし一般的に言つて労働者の闘士的活動は、たとえ左翼に対して最も彼の説明であろうと、決して、ユート、デイルの賛成の限界を通過させなかつた。生産の労働者の管理は、ヨーロッパの戦争の前夜で議事日程になかつた。しかし、是非とも、産業別労働組合会議は、約三〇の加入した労働組合及び約四〇〇万の登録者たちを持つていた。もしも人々が、アメリカ労働総同盟によつて記録された前進を考慮に入れるならば、労働組合の加盟者たちは、ローズヴェルトの選挙の時に三〇〇万に反対して、今後八〇〇万を越えた、とりわけもしも人々が、一九三九年でなお約一、〇〇〇万の失業者たちが残つたことを考えるならば、それは、印象的な数字であつた。北西部で木材諸部門において、石炭の生産する諸地方において（ハルラン委員会におけるまで浸透でもつて）、ロッキーマン脈の金属鉱山において、南西部の石油の諸部門において同様によつと、増大は、北東部及びミッドウエスタの産業の諸センターにおいて、もつと鋭敏であつた。しかし、南部の繊維部門における組合員化の失敗は、その結果、この地方が、遅れて残つていた。

労働組合のメンバーたちは、常に賃金労働者の少ない少数派を単に代表した。加工の及び鉱山の諸部門において集中さ

せた、そのメンバーたちは、しかし、U、S、S、T、I、Rの無視できない例外で、—メンバーたちが、時間の大部分、経営者に反対して非常に辛い諸闘争の場合に確立されただけに一層多く、象徴的挑戦として、ブルジョワ体系のものであった。もしも彼の演説の政治的内容が、弱かったならば、産業別労働組合会議は、しかし、階級的連帯を考慮して自分の意見を述べた。それのお陰で、実は、産業における組合員化は、そこまで、社会の周辺を追いやった諸部門で係わることに到達した。すなわち、黒人たち、色々な民族的少数派たち、婦人たち。たとえほとんどあらゆるケースにおいて、賃金のレヴェルにおいて、分化が留まったものさえ、これらの社会集団は、一律に登録することはできた。その理由は、社会集団によって行使された職務は、しばしばこれらの計画について離れて留まった。

たとえ、黒人たちが、スト破りとして利用されたという妨げるため、—それは、しばしば過去におけるケースであった—、産業別労働組合会議は、黒人たちの間、定着されることに探し求める義務があったでなからうと。産業別労働組合会議が、その黒人たちの組合員化を希望した上に、そして恐らく一部分は組合員化を手に入れるため、産業別労働組合会議は、地方の政治的構造を変えるため、そして従って、組織の生活にもっと適合された場を持つため、南部の黒人たちを獲得するのを狙った、反人種主義の政治的綱領を持っていた。しかし同じ時間において、そしてたとえ、産業別労働組合会議が、一般的に言って均質の組織であったにしても—、産業別労働組合会議は、南部において離れた労働組合の諸支部の形成を受け入れるまで進行した。そして、産業別労働組合会議は、差別が存在した、諸企業において差別の効果を克服する状態になかった。人種の問題は、北部においてさえ、彼らの努力において、多数の労働者たちの人種主義に衝突した、産業別労働組合会議のため、多数の困難の源泉であったし、同時にその指導者たちの以前の態度を考慮して、諸労働組合に関して非常に疑わしげな、多数の黒人指導者たちの不信は出合った。産業別労働組合会議は、同様に、よりよく労働者を分割するため、黒人たちに對してある利点を割り当てた、フォード Ford のように経営者たちの経営家族主義に立ち向かう義務があった。産業別労働組合会議は、同様に、反共産主義の、そしてもっと一般的に保守的な圧力、多数の宗教の

前兆及び黒人の共同体を記録した。すなわち、要するに、産業別組合会議は、産業別労働組合会議において、社会的平等の亡霊と同様に人種の平等の亡霊を見た、南部において、最も逆行の諸勢力の対立を克服する義務があった（この地方において、産業別労働組合会議のある組織者たちは、クー・クラックス・クラン団によって殺された）。産業別労働組合会議は、しかし、その善意の多数の黒人の組織を説得し果せし、産業別労働組合会議は、その諸組織をその組合員化の仕事に巻き込むことはできた。戦争の前夜に、――黒人たちが、中間の労働組合の幹部たちのレヴェルで出席さえし、すべて特に産業別労働組合会議において、諸労働組合の内部に、しかし同様に、競争するセンターの形成の後、この問題について少しもっと開放的であることが明らかになった、アメリカ労働総同盟の内部に、五〇万の黒人たちは存在していた。産業別労働組合会議に関して黒人たちの態度を越えて、黒人たちは、一般的に言つて、ユード、イトル及び一九三六年で好意的であつた、黒人たちは、ローズヴェルトに対して彼らの票の七五％を与えた。かかる支持は、一部分は、人種の平等を考慮してローズヴェルトの行動に引き続いて起きる選挙民の自然発生的な反応を反映した。全般的に、その支持は、しかしもっと一般的考慮から来た。すなわち、大統領は、黒人の議員たちから構成された非公式の内閣を持っていた。すなわち、人種主義は、ファシズムと同一視されたし、ユード、イトルは、反ファシズムになった。すなわち、しかし誰にも増して、黒人たちは、大きな同盟の一部をなした。それは、政府の側の存在のように黒人たちを自分を見なすように認めた。正式な環境の中に、黒人たちは、シカゴの全米黒人振興協会 N A A C P の議長であつた、イッキーズ Harold Liles の丈夫な支持を及び世論において非常に人気のある人物、ローズヴェルト夫人を当てることはできた。その上、進歩的な組織、全国的黒人会議 N C C は、半正式的な法規を持っていた。

差別は、しかし、とりわけ南部において、大土木工事に当てられた労働者の雇用を固執した。そして、それは、イッキーズの努力及び大統領の最も影響力のある議員、失業者たちで援助の問題の責任者、ハリール・ホプキンズ Harry Hopkins の努力にもかかわらず、しかし、黒人の共同体のため建築された、建物は、――社会的センター、民衆の住居、大学――建

物をなおより多くの結集力を与えた。これらの障害物にもかかわらず、一〇〇万以上の黒人たちは、黒人たちにとって、農業と家事の後、第三の所得の源泉であった、一九三九年で、大土木工事の見地によって援助を手に入れたことは別にして。

しかし、黒人の人々の解放のための闘争は、同様により多くの敗北を蒙った。すなわち、貸付け金に対する保証の事務局は、白人の地帯で黒人たちによって行われた不動産取引のケースに介入するように拒否した。すなわち、テネシー川流域開発公社―社会の実験の土地について最も効力のある企業―は、地方の諸伝統を尊重するように義務を負ったように自分が感じたし、差別の諸形態を実践した。ワグナー法は、差別を非難する何のバラグラフを意味しない（アメリカ労働総同盟は、バラグラフを受け入れなかったであろう）。すなわち、リンチを罰する連邦法は、可決されなかった。人々は、ニューデイルの最初の五年間において約一〇〇のリンチを記録したのに、分益小作人たち及び小作人たちの財産に対して加入を許した、一九三七年法は、非常にしばしば、それに言い張るため、必要な所得のレヴェルを持たなかったすら、そしていづれにせよ、所得の要求を困難にさせた、政治的雰囲気を考えに入れる義務があった、黒人たちに対して、制限されたやり方で、単に適用された。要するに、非常に多数の黒人たちは、社会保険について法律の及び産業関係について法律の適用を拒否されたように見られた。その理由は、これらの法律は、家族生活の活動も農業の労働陣営も支払わなかった。しかし、あらゆるこれらの障害物にもかかわらず、―警察の兇暴性に反対して及び黒人の労働者を利用するように拒否した、商人たちに反対して抗議するため、一九三五年でハルレンムでなお人種の暴動は存在した―、ニューデイルの年月は、黒人の共同体の希望の飛躍及び白人たちの敵意として希望の無力の感情の低迷を見出した。そして、それは、社会の全体を勝ち得た、進歩主義の雰囲気のお陰で。

一九三八年で、ニューデイルの危機は、深まったし、重大な亀裂は、ニューデイルを支持した、同盟において出現した。ローズヴェルトが、信頼できない味方であったから、しばしばローズヴェルトに反対してもたらされた諸批判、―

ルイスの、共産党の及び多数の他の数人の諸批判にもかかわらず、実際には、人は、従つて、自由主義者たちの及び左翼の戦線を分裂する危険を冒して、ローズヴェルトと縁を切ることに仕向けられなかつた。一九三八年の予備選挙の機会に、民主党をニューデイルの最も公然たる敵たちから片づけるため、ローズヴェルトの企ては、一般的に言つて、失敗について終わった。そして、国政選挙それ自体は、悪い諸条件において起こつた。彼が考察した、諸変化を成功させるため、ローズヴェルトは、例えば、黒人たちの及び貧しい白人たちの投票を獲得するため、南部において徹底的に取り掛かりながら、前に一步踏み出す義務があつたであらう。すなわち、しかし、それは、大統領が、あらゆる犠牲を払つて避けるように希望した、政治的闘争の研磨を意味したであらう。

その上に、疑いもなく工場占拠によつて引き起こされた恐れに關係して、人々は、一九三〇年代の終わりまで、反共産主義の及び反ユダヤ主義の強化を目標した。一九三八年で、その攻勢が、単なる共産党に制限されなかつた、アメリカ下院の、非米活動調査委員会H U A Cは、創設された。すなわち、アメリカ労働総同盟の指導者は、産業別労働組合会議が、共産党の管理下で及びニューデイルを、ベルキンズの、イッキーズの及びホプキンズの直接な問題視の形態の下に正規の攻撃を知つたことを確証しながら、その委員会の前に証明した。しかし、もしもローズヴェルトが、挑戦に應じられなかつたならば、それは、同様に對外政策が、毎日、もっと重要になつたからであつた。すなわち、たとえこれらの孤立主義者たちが、しばしばニューデイルの社会的綱領に好意的であつたようでも、ローズヴェルトは、共和党派閥の中に支配する孤立主義者たちに反對して、民主党の右翼（南の翼）を必要とした。彼の固有な内部の綱領の限界に関して鋭敏な不満にもかかわらず、彼の自由主義者たちの及び左翼の支持者たちの大多数は、ヨーロッパで及びアジアで反ファシズム干渉政策の名で彼を防衛し続けたであらうことは、ローズヴェルトは、理解した。さて、たとえそれは、反ファシズムの唯一の動機に賛成しなかつたようでも、それは、彼が、進行することは希望するように思われた、そこで、方向であつた。

一九三六—一九三八年の時期の間、社会党の内部に断絶は、及びニューデイルの及びローズヴェルトの政策に対して

党の対立の理由ですら、労働者たちに直面して党の増大する党の孤立は、完了した。一九三六年で、護衛兵は、アメリカ社会党 S P A から離れた。そして、その連盟の続きで、党の多様な機関、それらの間、新聞、研究所（ランド・スクール）、ラジオ局、労働者サークル、ユダヤ生まれの共済協会の同時に、ユダヤの及びフィンランドの部隊を訓練する社会民主主義連盟 S D F は、構成した。社会民主主義連盟の政策は、その連盟をニユー・デイルを支持するに至らしめた。それは、その連盟の反共産主義にもかかわらず、その連盟を共産党の側に置くであろう。

彼のメンバーたちの半分の喪失は、アメリカ社会党の定員数を約六、〇〇〇の加入者たちに追い込まれた。次の三年間、再び半分で追い込まれるであろう、数字。しかし、問題は、単に数の問題ばかりではなかった。すなわち、トーマス Thomas と同盟を結んだ、左翼の一部の政党における優勢は、すでに、ローズヴェルトを支持するように選択を作った、ヒルマン及び国際婦人服労働者組合の、ダヴィッド・デビンスキー David Dubinsky、及び繊維産業のエミール・リヴ Emilie Reeve のように、多数の労働組合の指導者たちを排除した。一九三八年で、ミシガン州知事のポストに対して彼の再選を保証するため、彼の不幸なキャンペーンの機会でマーフィを支持するため出発した、彼らの間に、同様に、合同自動車労働者組合の指導者、ワルター・ロイサー Walter Reuther は、見出された。トーマスのため、しかし、アメリカ合衆国は、資本主義を考慮してか、社会主義を考慮してか、決定的な選択の前に見出された。すなわち、ローズヴェルトは、明らかに、最初の陣営を選択した。

社会党員たちの自己破壊は、一九三六年で、アメリカ社会党においてトロツキー主義者たちの入会によって早められた。トーマスは、彼のものをアメリカの左翼の『全計略党』を建設するように留まった希望でもって、トロツキー主義者たちを迎えた。彼らの側のトロツキー主義者たちは、明白な目標で、党の規制を手に入れるように、あるいはとにかく、彼らが不可避なことを判断した。追放の仮設において彼らを彼らと引っ張るため、最良のミリタンたちを教育するように含まれた。事実次の年追放された、彼らは、彼らが、彼らの入会にひどい目に合わなかった、より多くのミリタンたちと出発

したし、もしも人々が、すべてそれは、彼らの言葉によれば、動き回る義務があつたであろう、大衆に直面してほとんど全体的な孤立において過ぎ去つた、事実を除くならば、彼らの食人種のような政策が成功であつたことは、彼らは、従つて言うことはできた。要は、彼らのため、前衛党を建設することであつた。一度、アメリカ社会党の外に置かれた、トロツキー主義者たちは、社会主義労働者党、S W P を構成した。それでも、トロツキー主義者の系列をなお多数の分裂を蒙るようになりはなかつた。同じ時期に、マストズミツは、宗教の危機を知つた後、政治的生活から身を引いた。すなわち、彼らが依存した、アメリカ労働総同盟系労働組合の全国的指導者たちと彼らの恒久的紛争にもかかわらず、トロツキー主義者たちは、しかし、マイヌアポリスのトラック運転手たちの環境において及びミッドウエストの他の地帯において、彼らの労働組合の影響力を広げ果せた。社会党員たちのローズヴェルトに対する対立の路線は、彼が資本主義を防衛した事実から当然、単に生じるばかりではなかつた。すなわち、その路線は、同様に、社会党員たちが、集団安全保障政策に到らしめた、嫌悪から生じた。『第三期』の共産党員たちとして—当時のアメリカ社会党は、実際にファシスト諸国とブルジョワ民主主義諸国の間、大きな相違で理解しなかつたし、従つて、それらの間の紛争が、プロレタリアートの利害を関係することはできなかつたと考えた。他方からすれば、ローズヴェルトの対外政策に対して社会党の対立は、トーマス及び多くの他の社会党員たちによつて公言された平和主義から摂取した。

一九三八年で、社会党の指導者は、戦争の外に、アメリカを維持するための委員会、K A O W を形成するであろう。平和主義者たちの及びラッフォレットの社会党員たちの及び他の誠実な孤立主義者たちの側での参加にもかかわらず、その委員会の効果は、しかし、偶然親ファシストたち及び親ナチ党員たちにした、右翼の政治家たちの影響力によつて制限された。ついにこの点に至ることは、今後社会党において支配した、極端な政治的弱点の及びイデオロギー的混乱の徴候であつた。共産党に関して、共産党は、党が人民戦線と見なした問題の欠くべからざる部分、アメリカ社会党の正確な反対の方向に見出された。この時期のアメリカ合衆国において、この政治的路線は、最もよく、進歩主義的定義によつて存在として

判断された、及び共産党員たちから、ローズヴェルトそれ自身を追放しないで、ある政府の人物たちまで進行した、諸勢力の非公式の及び書かれない再編成を意味した。共産党のため、しかし同様に多数の自由主義者たちのため、この諸同盟の体系は、ニューデイルの最も正確な反映であった。ある意味で、共産党は、この人民戦線の主要な支持者であった。単に、決してニューデイルの政府的諸勢力と共産党員たちの間の正式な協定ではなかったばかりでなく、一九三六年の国政選挙に対して、国政選挙のイデオロギーが、アメリカと縁のなかった、及び彼が、決して国政選挙の支持を探し求めなかつたことを、ローズヴェルトは確認した。地方レヴェルで、しかし、人々は、民主党と諸協定を記録する。そして、政府に対して、イッキーズのような誰かは、諸協定を味方たちとして無視しなかつた。しかし、非公式の同盟は問題であったので、共産党は、しばしば内幕で行動するように強制されたし、それは、共産党の覆えそうとする勢力のイメージを確認しようと思われた。

ローズヴェルトと一緒に、そして、ますます、民主党と一緒に設置された諸関係は、共産党たちが、どちらも反対して対象とした、無視できない諸批判にもかかわらず、アメリカ合衆国に対して人民戦線の本質自体であった。共産党が、広く代表された（青年たちの、失業者たちの、黒人たちの諸組織）、『人民戦線』型の幾つかの組織は、事実、諸組織と交渉した、ニューデイルの正式な諸機関でもって緊密な諸関係を維持した。共産党の支持者の動機は、その綱領を支持した、社会的諸同盟——大きな同盟——において同様に政府の自由な進歩主義的綱領において見出された。共産党員たちは、共産党が、アメリカ社会党が、大衆的諸政党で労働者階級の名で話す状態になかつたことを、理解した。この理由のため、共産党員たちは、すでに形成中であつた及び良い方向において取り掛かるように見えた、ニューデイルにしがみついた。同盟とニューデイルの綱領は、疑いもなく、共産党の欠如自体に形作られたであろう。ニューデイルの影響力は、同盟とその綱領をしかしより多くの実体を与えた。そして、すべての予測によれば、その影響力は、なおもっと急速な右へ偏流を避けた。

一九三四年の終わりで、共産党は、左翼の方向及び階級的闘争の綱領で、諸労働組合を押し付けられた第三政党的形成について態度を決めた。次いで、続いた、二年の間に、党は、中産階層にまで広げられ得たであろう、戦争とファシズムに反対して必要な同盟の考えを提唱した。綱領は、しかし反資本主義的のままである義務があったし、同盟の本質的条件は、組織された労働者たちの大量の参加を留まった。一九三六年の国政選挙について、共産党は、たとえその綱領が、弱点を代表したもので、もしもその立候補が、第三政党的であることはできたならば（それは、民主党の中に断絶を想定した）、多分、直接にローズヴェルトの立候補を押し付けたであろう。問題は、それが、もつと上に指示されたように、産業別労働組合会議は、かかる草案で合意していなかったことであつた。国政選挙の直後に、共産党は、なお第三政党的ありそうな形成に期待した。しかし、民衆界の側に民主党の強化を指示した、ローズヴェルトの勝利は、それが、アメリカ史の二つの前の大きな危機（一八世紀の終わりで及び内戦を先行する時期において）の機会でジェファソン及びリンカーンの新しい諸政党的出現した時期に、ケースであつたように、二つの大きな現存の政党的の一つが、たまたま越えられた、仮説において、第三政党的が、単に生まれることはできたであろう、考えを補強した。この条件は満足されないで、人々は、辛うじて共産党それ自体よりもっと重要な第三政党的の展望において生きることはできなかった。産業別労働組合会議が、事件に興味を抱くように確認したのに、共産党は、人民戦線が、第三政党的について民主党を定着することはできなかったため、民主党において（党の反動的翼を除けば）、人民戦線をますます検討するのを目指した。選択は、従つて、彼を左翼の方に押すようにあるいは少なくとも右翼の襲撃に対して多くの効果でもつて彼を抵抗するのを助けるように希望において、彼の政党の内部自体にローズヴェルトを支持することであつた。一九三八年の共産党の大会で、人々は、従つて『人民戦線』、すなわち、何の疑いもなく要求された、言語の曖昧さの代わりに、『民主党戦線』で話すであろう。

一九三七—一九三九年で、共産党は、ローズヴェルトの後退を批判した。すなわち、救助の減少、反リンチ法に対する支持の欠如、彼の綱領の一般的弱さ、共和派スペインに反対する出港停止、労働者諸闘争に対するためらう支持、通知さ

れた諸目標に対する闘うような拒否。共産党員たちは、同様に、機会があれば、利用された反独占的な修辭の前に当惑した。すなわち、確かにはじめに小企業家たちを救助する必要があった。しかし、人々は、資本主義の論理を逆にすることはできたか。中心的な考えは、共産党に対して、人民戦線の機能は、真のローズヴェルトによって体现された進歩的な綱領、一九三五—一九三六年の綱領の周りに全人民を結び付けることにあったことであつた。共産党員たちは、従つて重大な責任を定着した。すなわち、もしもローズヴェルトが、譲歩したならば、それは、同様に、共産党が、必要な諸同盟を作るのに成功しなかつたからであつた。すなわち、もしも労働者なしの諸部門が、工場占拠を恐れたならば、工場占拠を彼らの組織と關係を改良しながら、その意味を説明する必要があつた。すなわち、もしも南部が、圧迫の地帯とワシントンに反対する反動の家であつたならば、現実を変更するため、新しい歴史的連合体をそこに建設するのが相応しかつた。共産党が、この大規模な人民戦線を建設し果せなかつた事實は、党の努力も、産業別労働組合会議に対して単純な支持を越えてよく進行した、全体の政治的ヴィジョンも忘れさせる義務かなかつたであらう。

一九三九年のヨーロッパの危機の爆發まで、コミンテルンの路線が再び決定的となつた時、共産党は、大統領の側で、どうであらうとそれらの限界を留まつた。共産党は、評価した。大衆は、ローズヴェルトの側であらゆるケースの中に留まつていたであらう。そして、それは、単にケースの接触で、実は、共産党は、党の影響力を広げることではできた。他方からすれば、内部にローズヴェルトの譲歩は、今後国際的政策が、共産党員たちの眼に対して重大な問題であつた事實を希薄にしなかつた。すなわち、集団安全保障を考慮して、ローズヴェルトの路線は、平和の、反ファシズム闘争の及び「社会主義的祖国」の安全保障の諸要求に答えた。

もしもローズヴェルトが、倒れたならば、及び彼と一緒に、それは、彼が起ることができたであらう、なおニュー・ディールで留まつていたか。共産党は、ファシズムの脅威が、單純に外部の脅威ではなかつたということを主張した。もしも『第三期』において、アメリカのファシズムが、国家それ自体に対して内部の發展として見分けられたならば、共産党は、今

後政府の及びニューデイルの外に位置づけられた、そして政府とニューデイルを攻略するのを試みた、勢力として出現した。共産党は、単にこの勢力において、一九三六年の連合党、あるいは色々な右翼のデマゴグたち、同時に、公然と自分がファシストたち及びナチ黨員たちであると表明した、及び一九三〇年代の終わりでアメリカを歩き回った、多様な諸グループを数えたばかりではなかった。共産党は、むしろ共和党の周りに集まった利害のサークルの中に、連合党を理解した。すなわち、ハースト、アメリカ自由連盟、後に孤立主義者たち、しかし全部の上に、産業別労働組合会議に反対して極右を利用した、産業の及び財政の利害の大部分、黒人たちが及びあらゆる進歩派の人たち。共産党の分析は、従つて、『啓蒙な』資本主義に対する、そして、減らしたさえ、当時アメリカの社会において存在した、有利な諸勢力が占めた、地位を取り巻くように到着しなかつた。もしもトム・ガードラーが、前ファシストであつたならば、どうして当時ミロン・テイラーを定義するか。戦争の間、『人間戦線』の概念の新しい拡大は、テイラーのような人たちが、なおもっと広い進歩的な同盟において、職権により統合されたように見られたであらう時、その上、この分析の核の紛失を引き起こしたであらう。

ニ、ユ、テ、イル、の民主主義に反対するファシズムの——強く共産黨員たちによつて誇張された——脅威は、一九三〇年代末の共産党の観点において、全アメリカ史の中で反動と進歩を対立させた、永遠の紛争の再生された説明であつた。同時に、共産黨員たちは、左翼の新しい愛国主義の義侠たちとして、姿を見せるためにあらゆることをした。そして、民主党戦線のイメージが、人民戦線のイメージに代わりになつたにつれて、ローズヴェルトは、ジェファースンの及びリンカーンの靈魂の再生として出現した、それは、そこで、共産黨員たちが、表面的なやり方で、当時の彼らの闘争の正当化をそこで見付けるため、及びアメリカ史のひどく知られた鍵の瞬間を解釈することはできる、反省をそこで見付けなため、過去を読むように持つていた、知的な習慣の反映であつた。書かれた宣伝の活動、国際労働者友愛会、IWO——共済協会——、及び自然に諸労働組合における行動に加えて、人民戦線の時期の間、共産党の影響力の拡大は、型通りにあらゆる一連の

大衆的組織を通った。党に対する加入の数の発展は、それ自体、充分に、先頭に、共産党の路線をもたらすことはできた、個人たちを、あちこちで、自由にすることをできることに勝れていた。一九三四年で二四、〇〇〇の登録者たちから（それは、一九三〇年の定員数を三倍にした）、人々は、一九三七年で三七、〇〇〇及び次の年、五五、〇〇〇に到達する。もちろん、人々が、入った及び出た、人々が、必然的に反共主義にならなかつたことを、推定することはできるけれども、新規雇率の伝統的な問題は、留まった。しかし、これらの年月の新しい加入者たちの大部分は、イデオロギー的に、もしも人々が、伝統的なマルクスレーニン主義を参照するならば、始まりと疑わしい到着点を持っていた。すなわち、共産党の路線は、著しく変化したが、そして、それは、同様に加入者たちを実は変化させることはできたということとは、真実である。その理由は、党は、当時、進歩主義の一般的な精神と緊密な結び付きで動いた。党の公のイメージは、変化するために唯一のイメージではなかつた。党それ自体は、変化したが、すなわち、共産党員になることは、たとえ人々が、反共主義の頑強さを過小評価することはできなかつたにしても、外部にもっと許容し得るようになった。従って、共産党が、もはや直接に宗教に反対して行動しなかつた事実の重要性は、注目すれば足りた。労働者大衆は、多数派に、始まりのあるいはアイルランドのあるいは南の及び東のヨーロッパの個人たちであつた、そして従って、労働者大衆は、大部分は、カトリック教に獲得されたということ、を、忘れないであらう。すなわち、その上に、ケースの大部分において、労働者大衆は、まったく教会の諸構造によって挿入されたように見出された。

共産党の指導部は、それが、その時まで、習慣であつたように、登録者たちをまったく共同の支持者において統合するように避ける、新しい登録者たちに関して、党の態度を変更しようとする。すなわち、人々は、共産党を『狂信家たち』の党の共産党のイメージから解放することを希望した。そして、人々は、この事実から、もっと少なく『総括的な』約束を要求した。それは、単に組織それ自体を変更することはできた。すなわち、孤立された工場諸細胞の代わりに、人々は、それに諸労働組合の領土の構造によれば、産業の盆地全体の枠内で共産党の加入者たちの再編成を配置した。従って事を

行いながら、人々は、常に企業に自分の考えを表わした、人々を脅かした、解雇を避けること、そして常に労働組合の及び政治の諸活動の間の可能な諸紛争を避けることは希望した。同時に、人々は、共産党員たちの誠実さ及び労働組合の諸事件において介入しないように彼らの意思を証明するため、諸労働組合の内部に、率直に共産党の諸分派の形成を放棄するように決定した。

加入者たちの非常に大きな多数派は、従つて常に地区の基礎について集まった。すなわち、しかし、その時まで存在した、街頭諸細胞は、選挙区の中に領土の分割を尊重する諸支部の中に再編成された。すなわち、人々は、そのようなやり方で、正常な政治の仕事―国政選挙の間―を救助するのを、しかし同様に、このもつと伝統的な体系によれば、組織された、他の政治的諸勢力で諸関係を優遇するのを希望した。人々は、宣伝及びミリタンたちの組織を従つてもつと容易にする及びもつとつき易いにするように努めた。

諸証言は、われわれを、『第三期』のある加入者たち―どれだけ言うことは可能であるなしに―、及び幾つかの指導者たちは、完全にこれらの構造的な変動及び特に指導部たちをある『イデオロギー的な放任主義』から解放するらしく思われた、変動を受け入れなかつたことを指示する。彼らのため、一つの事柄は、資本主義社会の内部に闘争した、共産党でない大衆諸運動に挿入されることであつた。しかし、他の事柄は、イデオロギー的に形成されなかつた及び充分に戦闘的な諸基礎について組織されなかつたミリタンたちにもたれながら、階級的観点を失うことであつた。しかし、ブラウダーが、彼の左翼セクト主義のために糾弾した、この態度は、政治的路線が変化した間に、たとえ態度が、後に表面で戻るであらうものでも、人民戦線の経験に沿つてずつと弱まるであらう。

イデオロギー的な及び構造的な諸変化を越えて、人々は、登録者たちの民族的な及び社会的な構成において諸変化を注目した。すなわち、共産党は、アメリカ化した。そして、とりわけ、アメリカに生まれた、急速に人々のその潜在的な幹部たちになるため、党に入った。人々は、幹部たちの間、多数の労働者たちを見付けた。しかし、党内で、注目すべきや

り方で、初めて、技師たちの及びホワイトカラーたちの中産階層の中に共産党の浸透を反映した、都市のセンターに設置されたユダヤ人たちは、殺到した。黒人たちの間の仕事は、同様に、党内に統合されて見出された、数によって、しかし同じく個人たちの特質によって、成功のように考察されることはできなかった。すなわち、黒人たちの間、民衆の生まれの、アンジェロ・ハーンドン Angelo Herndon と裕福な及び共和党の南軍派の家庭の、ハーンドンの弁護士、ハーヴァードの免状所有者及び未来のニューヨークの市議員、ベンジャミン・デイヴィス・ジュニア Benjamin Davis Jr.。そして、党の地理的な定着である問題のため、共産党は、産業の及び都市の大きなセンターを越えて、党の活動を広げよう心に配した。^(三)

人民戦線の大衆的なあらゆる組織の間、それは、諸労働組合であったし、まったく特に、大きな聴衆に対して——しかし同様に党それ自体に対して——、共産党の影響力の大量の感情を与えた、産業別労働組合会議で近頃創設された諸労働組合であった。共産党は、初めから、産業労働者たちを組織するため、産業別労働組合会議の努力を支持した。しかし、共産党は、大きなセンターの中に実際勝利を当てる、アメリカ労働総同盟と諸関係を断つことは問題であった時、非常に慎重に留まった。産業別労働組合会議において共産党のミリタンたちの入会は、作られた。その理由は、そのミリタンたちが、新しい委員会の方に向き始めた、下部組織のグループの一部をなした。あるいはその理由は、そのミリタンたちが、彼らの才能を必要とした、ルイスによって直接に呼ばれた。

製鉄業の部門において攻勢を繰り広げるため、実際に、非常に大きな産業の流域の至るところで戦うため、真の肉体的な勇気をもつばら捧げられた及び与えられた、組織の大きな能力を持っている人間たちが必要となった。必要な特質を持った、人々は、偶然最も急進派であった。すなわち、ルイスは、社会黨員たち、世界産業労働者組合の旧会員たち、及び同じく炭坑労働者たちの労働組合の中に最初の時期の彼の敵たちを利用した。しかし、共産党員たちは、偶然最も多数及び最もよく囲み記事であった。製鉄労働者組織委員会の二〇〇の組織者たちの六〇人は、共産党の会員たちであった。すな

わち、オハイオ州において、党及びすっかり残らず青年問題の動きは、大きな攻勢に統合されたように見られた。共産党員たちが、民族的少数派たち及び黒人たちの間、与えられた、定着の接触及び地点を数えないで、産業別労働組合会議における共産党員たちを入れたため、彼を批判した人々に対して、ルイスは、一所懸命に答えた。すなわち、『どんなに彼らのポケットで落ちる、政治的宣伝であるかということを見るため、まっさかさまに、私は、私の責任者たちあるいは私の加入者たちを記入しない。』共産党は、党の管理下で、共産党員たちを捕まえて置くことはできたであろうということは、確信していた。すなわち、共産党は、『それは、鳥を取り、犬を取らない、猟師である』ということを、横柄な返答によって確認した。

しかし、ルイスは、単に二次的な組織者たちの共産党員たちを作ったばかりではない。すなわち、彼の法律顧問（労働組合主義の及びワグナー法の錯綜を与えた決定的な態度）、リープレスマン Lee Pressman と同様に、産業別労働組合会議の出版物の主幹、レン・デ・コークス Len De Caux は、正式の資格を持つ共産党員たちであった。あるいは少なくとも彼らは、党の路線を従った。そして、産業的労働組合会議は、全国労働関係委員会 NLRB において共産党員たちの直接の影響力を役立たせた。すなわち、特に、公式に経営者の態度を違法で非難することはできること、あるいは国政選挙の機会で代表の単位について自分の意見を述べることは、有効であった。加入者たち、あるいは党のシンパたちは、従ってラ・フォレット委員会の中に彼らの役割を演じた。すべてそれは、ルイスによって希望された意味において進行した。その理由は、その時まで諸労働組合の外に見出された、大衆の組合員化を進行するのを見付けるでないにしても、共産主義者たちは、彼らの固有な要求を決して前面に押し出さなかった。その上に、産業別労働組合会議の共産党の職員は、党の職員の独立した行動の分野を持っていた。そして、従って、その職員は、——たとえ職員が、行動の分野を望んだもので——外部の諸指令に盲目的に答えることはできなかった。

製鉄労働者組織委員会の位階制の構造は、一度労働組合の基礎を捨てられた、共産党員たちを除くように許した。しか

し、共産党員たちは、影響力が強かった、あるいは産業別労働組合会議の加入者たちの約半分のため、指導する集団を構成した。すなわち、それは、重要性によって第三番目の産業別労働組合会議系労働組合、合同電気労働者組合 U E W の電気機械労働者たちの労働組合のため、ケースであった。次の年月の反共的な論争を考慮に入れられた、共産党員たちが、決定的役割を演じた、諸労働組合（電気機械労働者たち、港湾労働者たち、乗組員たち、鉄鉱山作業員たち、皮革の労働者たち、自動車の労働者たちととりわけ都市交通部門の労働者たちを加えて）は、しばしば最も大きい内部の民主主義を知った、諸労働組合であったことを、注目するには、無益ではない。

一般的に言って、人民戦線の時期で、共産党員たちは、攻撃的なやり方で自分を目立たせなかった。しばしばさえ、他の諸勢力で統一の利害の中で、共産党員たちは、断絶を避けるため、大きな控え目で示した。すなわち、従って、共産党員たちは、例えば、自動車の労働組合の指導部から排除されるように受け入れた。人々は、その上、労働組合界において共産党の介入がまとった、全体において隠和な性格を注目することはできる。すなわち、一度労働組合を組織されて、そして一度経営者によって労働組合の存在を承認されて、共産党員たちは、占拠に、しかし同様に山猫ストに敵対だと称していた。客観的状况が、必要とならなかった、あまり厳格な諸行動（共産党員たちに対する大切な表現を使用するため）は、全国的進歩的な政策を支持するため、危険なやり方で欠くべからざる諸同盟の連帯を疑問視することができた。ゼネラル・ムーターズで占拠について、共産党の解説は、何よりも先ず、一步一步運動を強固にするように広げるのを心配しながら、従って慎重に行うように意思を証明する。

他方からすれば、彼らの自治の存在を持った、諸労働組合の外に、人々は、共産党員たちによって形成された、あるいはこれらの最後の人たちが、指導する役割を手に入れることに成功した、莫大な量の大衆的諸組織を観察した。すなわち、これらの組織は、ニューデイルの左翼を構成したし、これらの組織は、かかる政治的草案を実現するため、ますます必要な諸同盟を広げながら、この方向において進むことに探し求めた。それは、そこで、アメリカ合衆国に対して人民戦線

の最も兆を示す形態であった。すなわち、人々は、アメリカ合衆国に、選挙の諸同盟、国際的にせよ、地方的にせよ、特別の諸問題の解決に執着した諸グループ、あるいは同時に住民の特別な社会集団において働く諸組織を見付けることにはきた。すでにそれ自体に同盟であった、これらの組織のそれぞれは、理想的図式において、従つて反動に反対して進歩の一般的な闘争を強化する、他の諸組織の気掛かりで組織網を構成する積りであった。

共産党員たちが、支配する役割を演じた、純粹に選挙の同盟の最良の模範は、党の固有な進歩的な綱領を持っていた、しかし一般的に言つて、二つの大きな政党において最も左翼への立候補者たちを支持した、ニューヨークのアメリカ労働党、ALPであった。これらの立候補者たちが、アメリカ労働党の印を保持する別々の投票用紙について言及されることはできた時から、この組織の比重は、直接に選挙当選者について感じさせることはできた。すなわち、一九三六年の国政選挙で、例えば、この組織は、ローズヴェルトに対して、約三〇万の投票者たちをもたらした。比例代表制で選ばれた、ニューヨーク都市の市議会にとつて、アメリカ労働党は、ある立候補者たちが、共産党に帰属した、党の固有な立候補者たちを立候補させた。

最も有名な組織は、一九三三年で創設された「組織は、従つて最初の組織であった」、そして、一九三七年で平和と民主主義のためのアメリカ連盟と呼ばれるため、名前を変えた、戦争とファシズムに反対するアメリカ連盟であった。共同安全保障政策に賛成して、この組織は、青年たちの諸連合の、宗教的、スポーツ的及び婦人たちの諸グループの代表者たちを迎えた。この組織は、共産党の路線を従つた。しかし、この路線は、連盟が、共産党員たちの多数派からその指導部まで起こることはできた、かかる点に対して、非常に多数のアメリカ人たちに對して正しいように思われた。すなわち、一九三〇年代の終わりまで、会議の全国的委員会において、人々は、その上共産党員たちにまったく結び付けられなかった、組合活動家たちと同様に、主要な新教の諸組織の代表者たち、会議の二つの会員たちを見付かった。

同じやり方で、共和派のスペインに對して通貨及び機器を収獲するのに委任された、組織は、非常に多数の加入を受け

取った。地方レヴェルで、人間の裕福のための南の組織は、政治的左翼——そこでお、とりわけ共産党員たち——と自由主義者たちの間の同盟であった。南部において組合員化の飛躍に有利な、組織は、黒人たちの諸権利及び選挙の税（人頭税）の廃止を推進した。組織は、エレノア・ローズヴェルトと最高裁判所で判事、フェューゴ・ブラック Hugo Black と同様に、南部の多数の進歩的な白人たちの支えの恩恵を浴した。そこでお、この組織は、共産党の管理下にあったことを確認することは、困難であるであろう。

共産党員たちにとって、民族的少数派たちの中で定着された諸組織は、ヨーロッパで組合員化と共同安全保障を考慮して、宣伝を作るために最も有効な道具であった。同じやり方で、南部の黒人たちの自決に対して党の権利の路線をこっそり掛けたという事実は、共産党に対して、修道会員たちと共和党員たちを含めて、黒人の共同体の代表者たちの規模の大きな選択の幅を集めるような可能性を与えた。一九三六年で創設された全国黒人会議は、差別のすべての形態に反対して及びニューディールによってなお係わられなかった、人々に対して、ニューディールの諸利益の拡大について指導された政策を追い求めた。会議は、スコツボロの子供たち、しかし同様に、共産党員ヘルンドン Herndon を防衛した。そして、それは、すでに言及されたように、会議は、産業別労働組合会議に有利であった。知識人たちの間、最も重要な集団は、一九三五年で生まれた、アメリカ作家たちの連盟の集団であった。すなわち、常に共産党の近くの、連盟は、『第三期』に及び『プロレタリアの文学』の文化的路線に結び付けられた、ジョン・リード John Reed Ⅱ クラブを取り替える積りであった。エルネスト・ヘミングウェイ、アーチボルド・マック・レイシユ Archibald Mc Leish 及びグランヴィル・ヒックス Granville Hicks のように、アメリカ合衆国の最も不思議な作家たちの及び批評家たちの幾人かの人たちは、その中に数えられた。しかし、連盟は、間もなく、モスクワの訴訟によって、トロツキーの態度の決定及びスペインの内戦の展開を引き裂かれた。

マッカーシー主義の時期に、これらの組織に属した、多数の自由主義者たちは、彼らが、共産党員たちが、それらに演

じた、役割を知らなかったということを主張した。しかし、自由主義者たちを信じることは、非常に困難であつた。その理由は、共産党のスポークスマンは、非合法でないやり方で、それらに見出された。すなわち、疑いもなく、自由主義者たちは、どれだけ共産党が、ニューデイルの政策の受取人と思つていた人々に対して、正統なグループであつたかというむしろ忘れることを望んだ。

実際には、これらの大会、連盟あるいは会議のリスト——ここで引用されたよりもっと多くの大会等によく存在した——は、大会等が手に入れた、諸結果よりもっと印象的である。その理由は結局、大会等は、大会等が構成された目的を到達することはできなかった。すなわち、ニューデイルを突き進むのに駆り立てること、及び、最悪の場合には、ニューデイルの後退を抑制すること。対外政策の諸問題は、容易に集団安全保障政策に有利な諸態度を採用するのに左翼の一部分に至らしめることはできたということは、真実である。しかし、分裂の諸源泉は、平和主義的な諸傾向の存在でもって、あるいは、すべての状況の中に、第一のプランで、革命の問題を置いた、左翼主義の問題でもって、もはや欠けていなかった。その上に、ソ連邦で訴訟は、かかる国家及びアメリカ合衆国の共産党員たちを味方たちのために持つような時機を得ていることについて、左翼界において多数の疑いを引き起こした。すべてそれは、ヨーロッパで戦争の勃発の前に及び劇的に人民戦線の可能性を終らせた、ソ連邦とドイツの間に署名された協定の前に、生じた。この政策が、一九四一年で共産党員たちによって取り戻されるであろう時、諸条件及び諸優先権は、はつきり変えられるであろうし、初めの諸疑惑は、消されないであろう。

この第二のニューデイルの時期で、ローズヴェルトの政治的諸選択を支えた、基本的な諸原則は、第一のニューデイルの諸選択を非常に違つていなかった。すなわち、よりよくその精神及び現実を保存するため、体系を改良すること。すなわち、もしも体系を必要であつたならば、その利益を引き出すことはできなかった、人々の反対にもかかわらず、この改良を実行すること。すなわち、先験的になしで、しかしブルジョワ民主主義の枠の中に、諸方法を選ぶこと。すなわち、

正確な社会的及び政治的諸集団でもってすべて決定的な協定を拒否すること。事實上、協定は、公の領域において権力を入らせるよりもむしろ実業界の権力を制限しようと努めた。そして、起り得る反独占的な修辭—その上、社会主義のあるいはマルクス主義の性格で決してなかった—は、この世界の存在を決して脅かさなかった。取られた諸措置の付加を越えて、その時これらの年月の政治的総括は、少しも急進的ではなかった。すなわち、ローズヴェルトは、明白なやり方で共産党を従った、しかし共産党を導かなかつた味方、共産党の諸勢力と同様に右翼の諸勢力を近づけないながら、民衆の支えを保存するのに成功した。

しかし、もしもローズヴェルトが、急進派でなかつたとすれば、少なくとも、一九三五—一九三八年は、そのようなものとして考察されることはできるか。民衆の精神傾向（心性）、政治的諸構造は、左翼の方向に基本的諸変更を蒙つたか。人々は、答えるため、共産党の前進を手初めに評価することはできる。共産党が建設した問題の連帯は、測られるであろう時、それは、とりわけ次の年代を考えながら、作られることはできる。共産党は、事実上鋭敏な発展を知つた。そして、共産党は、もつと受け入れられることになつた。人々は、しかし、もつと民衆的ヴィジョンによつて階級的ヴィジョンの取り替えが、暗示することはできただであらう、判断を考慮しないながら、党の全国的政治的綱領の中に、一連の支離滅裂及び矛盾を目立たせることはできる。共産党は、党の目標が、社会主義の体系に対して通過権であつたことは、決して隠さなかつた。すなわち、その上に、共産党は、最も進捗を示されたそれらの局面においてさえ、ニューデールが社会主義であつたというのを、言い張らなかつた。共産党の政策は、しかし、本質的に、ニューデールに対して及びそのリーダーに対して支持の政策、すなわち、しかし、かかる拡大（もつと多くの社会的諸措置、もつと多くの労働者たちに対して及び黒人たち等に対して諸権利）が、社会主義に導くことができた、断言は、与えられることなしで、党の拡大を考慮して政策になつた。厳格にソヴィエトのモデルに同一視された、社会主義は、なお地理的よりもつと多く、歴史的にアメリカの遠方のあるものになつた。アメリカ合衆国の共産党員たちが、偶然だまされた、理論政策的問題は、ソ連邦

でこの社会主義の実現とアメリカで作り上げられた問題の間、関係は、まったく明白でなかった、事実には困った。どのやり方で、アメリカ合衆国に対してロシアモデルを適用することが可能であろうと知ることが、まったく明らかにならなかった。

共産党は、政策―虚構の方へあらゆる彼の諸偏光にもかかわらず、彼のため、明快さの及び正確さの諸特質を持った、フォスターの書物、ソヴィエトアメリカに向かつて、であった問題の同等のものを、人民戦線に対して提供するような可能性を持たなかった。同じような書物は、人民戦線の年代において書かれ得なかつたであろう。その理由は、ニューディールの拡大は、ソヴィエトのタイプの社会主義に到らしめなかつた、そしてアメリカの共産党員たちは、他のモデルを想像することはできなかつたといふことは、明らかであつた。共産党の指導者たちは、それでも良い方向に進むよう、ある人々であつた。そして、ローズヴェルトが、一九三六年の有名な演説の中に、アメリカ人たちのこの世代が、運命と会合の約束を持ったことを確認した時、共産党の指導者たちは、何の疑いもなく、彼らが、その中に数えられたことを評価した。共産党の戦略は、継続するやり方で、党の諸組織の及び人民戦線の諸組織の数を増加するため、そのようなやり方で、努力に帰した。しかし、この時期の間、国際的共産主義の中に、アメリカ合衆国の共産党が、特殊な及び新しい状況に対処した、そして共産党が、何の他の経験を当てにすることはできなかつたことは、承認することが必要である。すなわち、どうして、主要な問題が、明白なやり方で、ファシズムも、その脅威もない時、改良主義の政府に関して、人民戦線の戦略を適用するか。

社会主義の方に移り変わりの路線において、これらの欠如と同時に、かかる変化のために必要な道具の欠如の問題は、提起された。共産党は、党には大衆的大政党（一億四、〇〇〇万の住民たちの国家において、党は、常に一万の加入者たち以下に位置づけられた）になることは、困難であるだろうことを、よく理解した。共産党員たちが―そして彼らが、唯一の共産党員たちでなかつた―、一九三四年と一九三七年の間、話した、労働者農民党は、たとえ人々が、どの正確な方

向において変化を結ばれる積りであったか、当時はっきりと知らなかったとしても、このタイプの道具であることはできたであろう。人民戦線の、すべてのあまり専門化された諸組織も、もっと強い理由でさえ、民主党も、—イデオロギー的に社会主義に反対していた、そして強い反動的翼を与えられた—、定義上、かかる道具を構成することはできなかった。これらの矛盾に対して出口の調査において、共産党は、党が諸矛盾と接触を探し求めたであろう、仮説において、単に抽象的討論のレヴェルについて動いた、社会黨員たち及びトロツキー主義者たちにあつては援助で見付けることはできなかった。共産党は、それ自体、提案するために択一的な理論を持たなかった、コミンテルンによつて、もはや導かれることはできなかった。アメリカ合衆国の共産黨員たちは、誠実な反ファシズムの確信でもつて、集団安全保障政策を支持したし、従つて、ファシズムと戦争に反対してソ同盟とアメリカ合衆国の同盟を支持した。コミンテルンは、別の何も要求しなかった。そして多分、コミンテルンは、共産党の別の何も期待しなかった。

共産黨員たちが見出された、ジレンマの政治的結果は、たとえ彼らが、大統領と彼の党が、これらの理想を放棄した、これらの瞬間において、ニューディールを作るのに唯一の政治的運動であるように思われたにしても、ますますニューディールに対してその支持を延長することであつた。しかし、ニューディールの路線は、大衆の支持を及び多数の及び重要な人物たちを配置する、民衆に留まつた。共産党を防衛しながら、共産党は、とにかく、党が、社会的生活の中心に及びその周辺にはなく、留まることはできたということ考へた。今のところ、それは、そこで、実は、あらゆる党の理論及び党の政治的実践は、その基礎を置いたことであつた。従つて、共産黨員たちは、ニューディールが、分裂し始めた時、麻痺されたままであつた。すなわち、セクト主義において及び孤立において倒れるような恐れは、この展望の囚われの党を残した。共産党は、他の可能な選択は存在しなかつたということ考へたし、党は、同じ道に固執した。すなわち、一九三九年で、ソヴィエトの対外政策の唯一の諸決定は、共産党をこの路線を止めるに至らしめた。

ブラウダーは、恐らく、この行き詰まりを意識していた。そして、共産党が、連合の、従つて一九四一年の諸事件の中

に、戻つた時、共産党は、はつきりと未来において可能な社会主義の変化の考えを放棄しながら、ある方向において行き詰まりを解決した。すでに、人民戦線の時期で、共産党は、ローズヴェルトに対して、プロレタリアート独裁の問題が、単に、大統領が、もはや、現存の体系の中にもますます高い生活のレヴェルを保証する状態にないだろう、仮説の中に偶然提起されたであろうということを、保証した。すなわち、しかし、この目標を到着するため、共産党は、党をあらゆる党の諸勢力で援助する用意のできたと考えた。

共産党の路線の問題は、単に、もつと特別に政治的レヴェルに集中された、一九三〇年代の多少とも急進的性格について、議論の結果である。すなわち、もつと結局のところ、人々は、イデオロギー的な方向の決定の及び大衆の活動の問題を偶然提起された。色々な研究は、リンド Linn の移り、変わりの中で、ミドルタウンのように、相対的な抗議の欠如、ほんやりした受動性、大きな文化的な諸傾向の絶対的な継続性、反共主義の固執を浮き彫りにした。結果として生じる、イメージは、反抗のイメージよりはむしろ苦痛のイメージである。すなわち、私的な及び全然共同の経験として見分けられた不景気の悲劇。

これらの研究は、われわれを空の諸表情の及び敗北した諸表現の諸局面の下に住民を証明する、これらの有名な写真あるいはこれらの小説のようにずっと、不公平な観点の結果である。どこに大衆が、この時期において達していたか理解するため、比較の点は、大衆が、当時の状況において、作る義務があつたであろう、問題のいささか一連の抽象的な理想であり得ない。それは、大衆が前線であつた問題、そして、大衆が次いで変転させる問題、もしくは大衆が変転するのを目指した問題である積りである。もしも当時のアンケートが、革命的な精神状態で証明しないならば、人々は、それにもかかわらず、発展を記録する。すなわち、一九二〇年代に対して、人々は、とりわけ産業労働者たちと失業者たちの間、不景気の間、私的な財産の神聖な性格を問題にした、富の再配分が変更する必要があつた及びそれが、そこで、政府の任務であつたということを認識した、そして、もしその必要であつたなら、それが、合憲的な諸変化を横切つて生じる積りで

あつたということを考えた、沢山の人々によって驚かされる。確かに、そこで、社会の全体的な変化のため、長い時期について及びその人で支払いながら、集団的に闘争するような必要性を自覚は存在しなかつた。しかし、これらのアンケートの諸結果は、単に、もしも人々が、出発点を忘れるならば、失望させることはできる。

明白に、継続性の構成要素は、位置を決定し得る。いずれにせよ、人々は、変わった問題を否定することはできないことは、事実である。さて、変化は、アメリカ合衆国の政策の鍵Ⅱ構成要素を変更するのに十分な重要であつた。不景気の年代において、そしてもっと特にニ、ユ、ド、イ、ルの年代において、それは、新しい歴史的な立役者たちの出現であつた、当時のようにかつて、従属する労働者たちは、従つて、歴史的勢力の列に昇進しなかつた。産業労働者たち（もっと特に、組合員化が、最も強かつた、加工業の部門の七〇%のサラリーマンたちが、代表した、一〇〇以上のサラリーマンたちの諸企業）は、分益小作人たちと農業労働者たち、すなわち、アメリカの住民の最も自然の恵みのない諸階層のようになつと、ホワイトカラーを、しかし彼らにばかりでなく、同様に明確化される。実は、産業労働者たちは、当時経済的闘争の中に入り込んだ。しかし、組合員化が、この時期に、はつきりと政治的横顔を持つたことを忘れないで。すなわち、それは、事實上、労働者たちの政治的反省の初めであつたし、大衆が後にモデルになつたであろうように、当時大衆の生活より切られた、官僚的機関でなかつた、新しい諸労働組合のモデルに建てられた諸機関に対して、大量の参加の初まりであつた。そして、人々が、従属する労働者たちを思い起す時、人々は、明白に、黒人たちに、移民たちの息子たちに、婦人たちに、非新教徒たちに関わる。この最後の集団に関して、人々は、最も重要な指導者たちについて、製鉄労働者組織委員会の指導部のものである、カトリック教徒フィリップ・マレーイ Philip Murray を、あるいは、ユダヤの生まれの、ヒルマンを考える。そして、たとえ婦人たちが、特別の役割を承認しなかつたとしても、そしてたとえ労働組合の諸闘争における婦人たちの介入が、何よりも先ず、支持者の行動として考えられたとしても、人々は、単に、たとえ諸集団は出席しただから、及び諸集団は今後あるものに対して数えただからであろうと、あらゆるこれらの集団、婦人たちを含まれ

た、は、組合員化の及び政治的生活に参加の観点によって、自己管理の諸集団の威厳及び諸集団の能力を増大するように考えたということを、否定することはできない。

もしもこの現実が、必然的に政治的急進化の方へ進行を含まなかったならば、この現実には、その必要な前提条件となつた。大衆の増大する参加及びこの参加の政治的な諸展望は、改良主義の一世紀毎の問題を供給した。すなわち、問題は、ブルジョワ体系を強化したのか、あるいは、問題は、大衆をなおもつと厳しく闘争することを許すことができたであろう、レヴェルの方へ大衆を育てたか。そこでなお、次の年代は、はつきりと資本主義の強化の方向に答えた。しかし、人々は、この時期において、労働者たち及び新しい彼らの組織が、肝心なことは、政治的な競合の場において考慮に入れる積りであつた、そしてその価値は、なおまったく定義されなかつた、独創的な作品になつたということを、否定することはできない。ニューヨークの及びフリントの、アクロンのあるいはデトロイトの方から。そして、首都のポトマックの河あるいはハイドパークのハドソン川のようにずっと、人々は、至る所で、産業の流域地方のモノガヘラ川を知つていた。^(四)

アメリカ合衆国は、ニューデイルの及びローズヴェルト彼自身の周りに、特に、疑いもなく、この最後の人に一致させた支持者によって、労働者たちの第三政党的形成を妨げた、しかし大衆的労働組合主義の飛躍を優遇した、産業別労働組合会議を、及びその影響力が、特に産業別労働組合会議それ自体の内部に、党の加入者たちの数——しかし増大する数——よりもっと強かつた、共産党を、進歩的と判断された、社会的及び政治的諸勢力の非公式の再編成において、人民戦線型の同盟に対して、単に一連の代替物を知つていた。^(五)

八

第八の論文は、ガボル・ツェクリ Gábor SZÉKELY（ハンガリー研究者）『コミンテルン、社会主義労働者インタナシヨ

ナル及びフランスの人民戦線』である。この論文は、五〇年振りで、回想されている。

歴史的研究において、かなりまちなちな諸意見は、フランスの人民戦線の最終的な局面に関する時期について現われた。時期それ自体は、今日まで諸議論の対象となる。(これらの問題について、ジァノス・ジェムニッチュ Janos Jemnitz は、フランスの中に、人民戦線、歴史的研究の問題、立場、原稿、一—三〇頁、の中に、全体の見解を与えた。)

今日、—理論的に—左翼の多数派の政府が、急進党員たちの方向の下で、組織されたことはできたであろう時、人民戦線の諸先例は、フランスの国民議会議員選挙の日付、一九三二年まで、また上がるよりむしろ、人々は、主張する、諸意見を根柢のないものとして考える。もしも、実際に、フランスの歴史的諸事件の観点から、この過去に回顧が、国際的背景の発展を考慮に入れながら、誇張であるならば、そのようなものとして考えられることはできるところではない。人民戦線の方向の中で行動する、一九三二—一九三三年の歴史的諸過程—及びそれらの過程の結果—は、ベラクンが、一九三五年で、コミンテルン第七回大会で、増大する戦争の危険で及びファシズムの進行で返答として創られた、アムステルダム—ブレイエル運動に対して、人民戦線のデビュを再びもたらしたと同様に、パルミロリトリアッティあるいはフランス共産党第八回大会でモリス・ストレーズ及びマルセル・カシャンのような、慎重に、当時で及び幾つかの同志たちを研究されたということは、注目するのは興味深いものである。(コミンテルン第七回大会、ブダペシュト、コシュト出版社、一九八五年、二六—三九頁の中に、ガボル・ツェクリ『反ファシズムと反戦世界大会』)

人民戦線の本質的な思想に関して、一九三二年八月で組織された、ロマン・ロラン及びアンリ・バルビュスによって後援された、反戦アムステルダム大会は、すでに最も重要な二つの主要点を含んだということは、議論の余地がない。すなわち、目標は、諸勢力の政治的確信から独立した、あらゆる反好戦主義の諸勢力の大きな連合、及び現存する社会的制度を考慮に入れないで、侵略に反対して国民防衛の必要の承認(中国に反対する日本、ソ同盟に關した)であった。同時に、ヨーロッパで及びとりわけ世界の中で、平和の維持の必要を強調しながら、議論されたにせよ、この考え方は、すでにブ

ルジョワ民主主義を含んだ。（議論の要点は、運動が、単に帝国主義戦争に反対して、あるいは一般的に言つて戦争に反対して掛かり合う積りであつたか、ということであつた。パリで世界委員会の一九三二年二月の会期で、フランスの社会黨員プービィ Poupy は、平和主義者たち、サンディカリストたち及び無政府主義者たちを獲得する目標をととして、すべての戦争に反対して議論した。ヴァイヤンクテュリエ、ミュンツェンベルグ Munzenberg、ラカモン及びシュヴェルニク Chvernik は、議論に参加した。次いで、形容詞『帝國主義的』を除去するように、妥協は、介入した。中央党文書、ソ連邦共産党の前でマルクスレーニン主義研究所、—後になつて、中央党文書、マルクスレーニン主義研究所—五四三。—二フラン—〇デシ（1/10フラン）—一五五巻。議定書。）

もつと緊密な理論的な諸基礎について、反ファシズム世界大会の組織が、始まつた時、一九三三年の初めで、この考えに関して、後退はあつた。それは、二月二六日のアピール—一九三三年の反好戦主義の綱領に反して—は、『下部組織での統一戦線』のスローガンの下に生まれたということである。そして、もしも人々が、ブレイエル広間で六月の大会でブルジョワ民主主義の防衛の必要を強調したならば、人々は、『階級的闘争の味方たち』、すなわち、共産党員たちの方向の下に、単にその必要を受け入れた。（それは、この方向において、実は、しつこくドイツ人E・マイヤー Ernst Meyer は、介入した。そして、それは、大会の最後の資料の中で挿入された、同じ公式化である。詳細に、ガボルツェクリ、国際的労働運動の歴史から、一九八二年報、コシュト出版社、ブダペシュト、一九八一年、五二一—六六頁の中に、『アムステルダム—ブレイエル運動と反ファシズム統一』を参照。）

それにもかかわらず、二つの運動の、従つて、全国反好戦主義委員会の及びヨーロッパ反ファシズム労働連合の統一について、非常に激しい議論、次いで、コミンテルンの決議の後、二つの運動の控え目な統一は、もつと大きな連合に対して態度の決定で終わつた。（この議論は、反戦世界委員会が、反好戦主義運動の最も大きな基礎について恐れる、当時二つの運動の平行する維持のために議論した、その組織書記ギユイリエラム Guy Yerran によつて代表された、パリで、ヨーロッパ反ファシズム労働連合の共産党分派の六月二二日の集会で展開された。中央党文書、マルクスレーニン主義研究所、五四三。—二フラン—〇六一

一一七デシ。巻。議定書。）

社会党員たちを獲得すらできた、事実、共産党員たち、平和主義者たち、ブルジョワ急進党員たち及び特に知識人たちの諸組織を統一した、人民戦線の文字に對して、最初の組織は、従って、フランスの国内政策の基礎について生まれなかつた。（社会主義労働者インタナショナルは、コミンテルンの「策動」の運動を資格を与える、参加を拒否した。それは、ロマンシロランの苦い諸路線を引き起こした。諸手紙の交換は、文書と討論、国際的情報誌の記録付録保管所、一九三二年七月二三日、よつて出版される。）

さて、明白に、それは、社会主義インタナショナルとは関係があつた。その理由は、運動は、そのインタナショナルに最も深いそれらの根源を押しした。——運動の中心及び最も重要な諸組織、最も顕著なそれらの行動は、世界大戦の勃発まで、この運動の中で起こつた。他方では、すでに一九三四—一九三五年で、統一労働総同盟と労働総同盟という、諸労働組合の代表と同様に、フランス共産党とフランス社会党という、諸労働者党の代表を含んだ、アムステルダム—ブレイエル運動の枠内に作用された協力は、明確にフランスの人民戦線の誕生に貢献した。一九三五年七月一四日の行動、フランスの人民戦線の全国的特徴の及び大衆的最初の行動は、知識人監視委員会の、人権同盟の参加とともに、アムステルダム—ブレイエル運動によつて六月一七日のために召集された、そしてあらゆる民主的諸勢力の協力のために態度を決した、集會に決定されたということは、あまり知られない。（一九三五年七月一四日。人民連合全国委員会よつて出版された。パリ、一九三五年、二九頁。すなわち、『どのよつに、一九三五年七月一四日の人民連合は、組織されたか。』）

はつきりと除けば、ブレイエル大会の行動及び組織のよつに、アムステルダム運動の行動及び組織は、少なくとも事実、コミンテルンから出發したということは、一連の資料によつて、証明することは必要ではない。行動委員会のメンバーたち、ロマンシロラン、アルベルト・アイニシユタイン、ハイブリッヒマン、バートランド・ラッセル、フェリシアン・シャルレイイ Felicien Challay、アプトン・シンクレイアは、正確にアムステルダム運動を知つていたし、根本的に、

それは、同様に、そのインタナショナルの拒否の中で、社会主義労働者インタナショナルの指導部の議論であつた。（大きな歴史的デモ見取図。帝国主義戦争に反対する世界大会。パリ、一九三二年、五一―六頁。）

しかしながら、これは、フランスの人民戦線が、コミンテルンの『命令によつて』形作られたことを、少しも意味しない。すなわち、諸条件は、左翼の急進的なあるいは多少とも急進的な解決のため、フランスで作られた。そしてこの解決の考え、その考えの実現は、人民戦線の基礎になつた。

人々は、どんな役割が、過程の中で、一方ではフランス共産党、個人的にモリス・ストレーズ、他方ではフランス社会党あるいはレオン・ブルムを演じたかを知る諸問題を議論することができる。人々は、なお、コミンテルンの政策について、より多くの質問の諸点を採り上げるであろう。コミンテルンが、漸次、そして矛盾なしでなく、新しい路線に対して、もっと正確にその必要を承認するために態度を決したということは、明白にするし、コミンテルンの公式の諸週刊誌の中で出版された諸著作物は、役割を証明する。（コミンテルン執行委員会書記局の事務局によつて、第七回大会の前に構成された巻と同様に、評論誌、コミンテルン誌。）（第七回大会の前で共産主義インタナショナル、パリの諸資料、全連邦（ボリシェヴィキ）共産党、モスクワ、一九三五年、六〇―六頁。巻の諸著作物は、一九三四年秋のために終わった。従つて、フランスの報告は、すでに現存する行動統一の可能性によつて及びその国際的拡大の考えによつて終わる。人民戦線について短い部分（二〇―二頁）は、大きな諸特徴でブラシを掛けられる。すなわち、諸任務は、統一戦線の諸任務に同一であり、『もっと大きな連合』が意味ある問題について、精密なものではない。）

コミンテルンにおける人民戦線の評価

われわれの配列に対して諸資料から、われわれは、統一戦線に反対して、人民戦線が、徹底的にコミンテルンにおいて

議論されなかったことを、結論を引き出すことはできる。多様な参照から、及び最初に最も有名な参照から、コミンテルンの文献においてほとんど至る所に引用された、人民の子という標題を付けられた、モリスストレーズの回想録から（社会出版社、パリ、一九六〇年）、人々は、ある指導者たちが、控え目でこの考えを迎えたことを、結論することはできる。しかし、われわれは、誰がある指導者たちが彼らの観点であったか、どんな彼らの観点であったかを、少しも知らない。コミンテルンのあらゆる文献において、人々は、単に、この主題、ハンガリー共産党の指導者たちの一人、ジョゼフ・レヴァイ József Revai の主題について、唯一の名前及び唯一の具体的な資料を見付けることはできる。コミンテルンのオーストリアの及びハンガリーの諸事件の報告者として、J・レヴァイは、一九三五年六月で、執行委員会に対して、『ファシズムからプロレタリアート独裁まで推移の問題』という標題を付けられた、彼の資料を送った。この資料において、レヴァイは、プロレタリアート及び彼の前衛、共産党が、権力の奪取後、一積極的例として、一〇月革命の後、ボルシェヴィキ的な、一左翼の革命的社会主義的な政府の同盟を述べながら、単に推移の諸形態を適用することはできることを確認しながら、態度を決める。（ハンガリー労働者社会党中央委員会の党史研究所の諸文書。資料は、同様に近い将来において、フランス語で取っ付き易いであろう。）

『人民戦線』という表現は、資料において描かれていない。しかし、一九二〇年代の前半（ザクセン及びチュリンゲン）において失敗した労働者諸政府への、それぞれ、一九二〇年代の後半において、日和見主義者として判断された、過渡的な権力の諸形態の目標として固定した諸スローガンへの準拠である。

人々は、レヴァイの記憶を筋を追ったであろう、議論で何の足跡を見付からない。多分、議論はなかった。すなわち、それは、人民戦線の概念が、すでに少なくとも六カ月から、知られたということである。しかし、その本質であった、『過渡的な諸形態』の問題提起は、当時第一のプランで前進した。その証拠は、それは、従って一九三五年六月の後半において、デIMITロフが、コミンテルン第七回大会のために準備された、彼の報告の周辺に、『ここに、推移の時期の政府に

ついて』（資料の最初のコミュニケーション、歴史の諸問題、ソ同盟共産党、一九七五年、八号、六一頁。）という、有名な諸路線を記録した、単にそこでこれらの日々であり、しかし単にこれらの言葉であるということである。―詳細に説明は、一月後で開かれるであろう、第七回大会で単に作られるであろう。

人民戦線の実現、必要な推移の時期の承認は、少なくとも危険の脅威の確信（ファシズムと戦争）と同様に重要であったように思われる。それは、それが、色々な傾向を代表する、諸組織は、事実諸妥協を含む、一時的な協商に到着することはできた、基礎であったということである。諸組織は、一方ではファシズムに及び戦争の危険に反対することはできた、他方では目標として、ブルジョワ民主主義的な諸権利及び諸自由の防衛と、諸権利及び諸自由の諸制度の防衛、あらゆる社会の急進的な及び同時に革命的な変化の可能性を除去しないで、反動的な諸権力に直面して国民防衛の組織を固定したのである、権力の形態を実現することはできた。これらのテーゼの最初の首尾一貫した説明は、コミンテルン第七回大会で宣言されたデIMITロフの及びトリアッティの諸報告において、そしてなおもつと諸討論に従った、最後の演説において行われた。（詳細に、ガボルツェクリ、反ファシズムと反戦世界大会、三三―三七頁、参照。）

大会の諸決議において指示された思想の他の特異性は、思想の弾性のある公式化に加えて、思想が、しばしば諸点に分裂された、その前の諸大会の諸資料において、一般的に言って、義務的、習慣的なものとして考えられた『行動の綱領』を連れていなかったということであった。デIMITロフ、しかし同様にトリアッティは、権力の過渡的な諸形態に関係のある彼らの報告の間に、至る所で実現できるものとして、少しもこれらの思想を考察しなかった。―彼らは、一般的に言って、具体的な歴史的諸状況において、解決策としてこれらの思想を特徴づけた。従って、間もなくフランスの共産党員たちに対して―そして当然同様にコミンテルンに対して―重大な問題を提出する質問において、人民戦線の勝利後、共産党の政府への参加の質問として、果敢な及び統一された態度が、解放されることはできなかったとしても、奇とするには当たらない。態度は、ここで、同様に『認め得る』ことであった。態度は、具体的状況において、賛否を重きをなすように

必要と思つた、そして、デIMITロフが、それを言ったように（評論誌、特別号、一九三五年一月一九日、二六〇五頁。）、「すつかり出来上がった決まり文句」を提供するのを望んでいなかった、コミンテルンの新しい戦略上の路線の性格に適合した。

歴史的諸資料及び回想録の中で、かなり大きな地位は、フランス共産党を政府への参加あるいは不参加を取り扱かう、諸情報の貧弱な諸源泉に捧げられる。（国際的労働運動史、一九八六年報、ブダペシュト、コシュト出版社、一九八五年、七八―九二頁、の中に、「一九三六―一九三九年、すなわち、フランス共産党の経済的政策について」という標題を付けられた、モリス・トールズ、研究所歴史雑誌の一七一―一八号のセルジュ・ヴォリコフの論文と同様に、ハンガリー語で、われわれは、「フランス共産党は、ブルム政府へ参加する義務があるか」という標題を付けられた、カタラン・ハスコ・Katalin Haskóの著作を公刊した。）

ともかく、これらの著作の結果、コミンテルンが、政府へ参加しないように、フランス共産党を少しも要求しなかったということになる。コミンテルンの詳細において知られなかった、一九三六年五月一日、コミンテルン執行委員会の書局の集会に対して、議論の最後の反響、次いで反響を従つた、五月一九日の議決は、二つの理由のため、コミンテルンのすぐ前の諸決議に比較されることは決してできない。その理由は、コミンテルンの演壇で諸討論の中で、政府への参加の敵たちが、人民戦線政府への参加は、なおフランスで望ましくない、コミンテルン第七回大会で強調しながら、優位に立つた、コミンテルンは、疑われることはできなかったのに、それは、しかし決定されたそれではない。議決は、フランス共産党の政治局で捕えられた。すなわち、五月一日の日付、拒否。コミンテルンの諸討論が、数日、議決を先行したのに、コミンテルンの議決は、フランス共産党の議決を従つた。そして、それは、すでに過去と比べて顕著な差違がある。（第七回大会から変わったケースにおいて、党の書記長、モリス・トールズは、政府への入閣のため、議論することはできなかったであろう。）しかしながら、他の理由は、なおもっと重要である。すなわち、第七回大会後、大会で採択された諸勧告を越えて、何の基本的な、イデオロギー的な及び理論的な資料は、人民戦線の及び過渡的な権力の諸形態の相

互依存について採り上げられない。それは、はっきりと、コミンテルン執行委員会の主宰の一九三六年六月の集会の後、公表された短いコミニケで生じる。コミニケは、モスクワでアンドレイ・マルティによって述べられた、フランス共産党中央委員会の五月二四日の全体会期で採択された、諸任務、すなわち、諸任務の承認とは別の事柄を含まない。（共産主義、*インタナショナル*、一九三六年、一三号、一〇三—一〇四頁。）

この断言を反駁しないで、ある変更は、すでに、コミンテルン執行委員会の主宰の一九三六年九月の集会の後、公表された、もつと詳しく述べられたコミニケにおいて出現する。コミニケは、諸議論を参照し、人々は、デイミトロフの次の注目を見付ける。『他方では、統一戦線の及び人民戦線の諸運動の発展は、新しい及びもつと複雑な諸任務の前に、諸政党を位置づける。われわれの諸共産党が、時間通りに及び諸党自体で諸党の過ちを改めさせることを学ぶ、フランス共産党の模範。』（引用書、一五号、一一六頁。）

コミニケは、どの種類の過ちで問題があるかを指摘しない。しかしながら、スペインで不干渉政策について、社会的及び経済的政策について、そして、他方では、ファシスト諸集団に反対してかなりしつかりしない態度について、ブルム政府の不十分な『毅然たるさま』に対して幾つかの暗示がある。この集会で、政府の『不干渉』政策は、フランス共産党に対して考えられないように思われたことは、ほとんど確信している。（それは、一九三六年七月の真中から、従つてスペイン内戦の勃発の後、すなわち、フランスで経済諸問題の激化の時、すでにすぐ前の議決の正しさの批判及び疑いが、始まったことを指示する、『不便さ』という表現を使用する、*ヴォリコフ*である。歴史雑誌、一七七一八号、一九七六年、一〇八頁。『フランスで人民戦線と共産主義運動。』国際協議会 I T H、リンツ、原稿、一九八六、七年。二二—二四頁。）

デイミトロフは、諸過失を話しながら、それをほめかしたということは、あり得る。これに反対して、この批判が、フランス共産党の固有な諸判断と違つたことは、何も指示しない。デイミトロフが、一般化されることはできる、諸経験を強調するように努力しながら、諸討論を要約したことを、人々は、むしろ考えることはできる。しかしながら、もはや

推移の権力の時期の及び諸形態の問題ではない。

人民戦線について、コミンテルンの諸構想及び諸意見は、最初に、世界政党の情報機関誌、同様に諸分析を含めた、評論誌の中で、ある諸事件に関して公表した、諸論文において、筋を追うことにもっと容易になる。多分、意外である最初の事柄、これは、例えば、『ムッソリーニの掠奪戦争に反対する闘争』、『新しい世界大戦の準備』、『帝国主義戦争及びファシズムに反対する闘争』のように、コミンテルンを心配させる主な諸話題に対して、あるいは、『五月一日、八月一日』、等という諸行動に対して、別々に諸見出しを捧げた、新聞は、人民戦線の何の見出しを出現させないということである。ある諸行動あるいは国々を分析する及び知らせる諸論文において同様に、われわれは、先ず最初に、『労働者階級の行動統一のための闘争』と『コミンテルン』という諸見出しにおいて、人民戦線に対して相対的な諸問題を見付けることはできる。それにもかかわらず、それは、人民戦線の諸問題が、最初の地位にいなかったことを、意味しない。これに反して、人民戦線は、コミンテルンで、第七回大会で採択された思想にもかかわらず、『先ず最初に統一戦線、次いで人民戦線』という計画の機械的な考え方が、現実には合致しないように、反駁されたということは、指示する。諸労働者階級の行動統一は、創設された、フランスの次いでスペインの諸人民戦線の基礎として考察された。諸労働組合の組織の統一、あるいは統一された党の考えは、やはり主張された。(『労働者階級の行動統一のための闘争』という見出しのタイトルは、『国際的プロレタリアートの統一のため』で、一九三七年の間で変わったかどうか、それは、偶然ではない。評論誌、一九三七年、六巻の内容目録、一九三七年、二二頁。)

コミンテルンが、人民戦線を、戦争の増大する危険、ファシズム及び最も具体的な闘争の形態、すなわち、スペインで干渉に反対する闘争の最も有効な手段として考えたことは、しかしながら、人々は、全員一致で確認することはできる。先ず第一に、二つの労働者インタナショナルの一つを創設しながら、——とりわけ、スペインの共和派たちに共通の支持を拒う、一九三七年のアヌマス Annemasse の交渉の失敗後——、コミンテルンの指導部が、ますます少なく、国際的統一戦

線を実現するような可能性の中で信頼するのに、人民戦線に対して、支持の有用性について疑う余地がない。そして同時にフランスで—スペインの後—、当時、一義性のやり方で、『責任を引き受ける』ように、政府へ入閣するような必要は、公式化される。それは、諸問題なしで進行しない。

共産党員たちの、社会党員たちの及び急進党員たちの（ピエール・コットのよう）、当時の政治家たちは、少なくともその問題が、人民戦線の維持の有用性、すなわち、人民戦線の諸党の協力を異議を申し立てなかった方向において、政府へ参加するようなあるいは政府へ参加しないような問題が、基本的に戦術上であつた、政治家たちの諸宣言において（そのように、人民戦線の三〇周年記念日の機会、一九六六年で組織されたパリの会議で、「一九三六年の人民戦線について国際的科学会議とモリス・ストレーズの行動」、パリ、一九六六年一月二四—二九日、それぞれ全体的諸分析において、モリス・ストレーズ研究所、クロード・ヴィラルール、ジャック・リシャンバ、ジャン・ブリュア、ジョルジュ・コニョ、クロード・ガンタン、人民戦線、モリス・ストレーズ研究所とマルクス主義研究調査センター、パリ、一九七二年、のよう）、公言したし、強調さえした。それは、問題が、逆に、人民戦線の働きと効果及び同時に諸党の協力を影響を及ぼした、他の問題である。すなわち、第一次レオン・ブルム政府へのフランス共産党の参加は、不都合よりもっと多くの利益を成り立たたであろうことは、理解することは易しい—それは、そこで、従つて共産主義運動から及び外部から来る、批判的な及び自己批判的な意見である—。

一九三六年の初めまで、人民戦線の戦略は、三つの形態及び多様な目標の下に、公式化された。結果の、多様な政治的傾向の反ファシズムの及び反好戦主義の協力の必要について、アクセントを置く、最初の形態及び目標は、パリの人民連合の一九三五年七月一日のデモの時、公表された支持において、公式化された。すでにもっと大きな、第二の形態及び目標は、一般的な理論的諸問題を目的としたし、国際的諸関連性を検討した、そして、同時に実践的な諸側面以下に仕事をした。人々は、コミンテルンの資料において、この戦略を見付けた。一九三六年一月で公表された、フランスの人民戦線の綱領であつた、第三の形態及び目標は、二つの最初の形態及び目標の諸結果を要約したし、人民戦線の特別な資料を

存在しながらずつと、諸結果に基づいた。二つの最初の形態及び目標と区別されながら、それは、すでに具体的な行動綱領であったし、同時に、同様に、経済的及び政治的諸要求を含む、選挙綱領であった。(ジョアニールベルリオズ *Janiny Berlioz* によって書かれた、コミンテルンの出版物の最初の分析、そして、人民戦線綱領のテキストは、評論誌、一九三六年一月一六日、一五—一七頁の中で、公表した。) 形態あるいは権力の資格で、人民戦線の推移の性格は、あらゆる資料、コミンテルン第七回大会で採択された諸資料において、一九三五年七月の及び一九三六年一月の諸アピール及び諸アピールの解説を感知し得た。それは、はっきりしないやり方で、(当時、パリで、アムステルダム・プレイエル運動の書記として働く、そして人民連合の組織に参加した、ハンガリー人サンドール・ノグラディ *Sandor Nogrady* の仮名であった、またの名コンラッド・ユルリッヒ *Conrad Ulrich*) C、U、で署名された、『自由の及び平和の真の雑誌』という標題を付けられた、評論誌の中で一九三六年七月一日、その前に公刊された論文から、しかし非常にはつきりと、一月の綱領でベルリオズの諸解説から生じる。ベルリオズは、フランス共産党が、人民戦線綱領を、『現実の制度の中で実現できる』(独創的テキストの中で強調された—ガボルリツェクリ) 最小限綱領として考えることは、しかし、同様に、『パンの、自由の及び平和の決定的な保証』が、『ソヴィエト—フランスにおいて』単に可能であることは、単に指示しなかった。(評論誌、一九三六年一月一六日、一一六頁。)

この最後の確認は、単に指示である。この確認は、歴史的展望で、フランス共産党が、プロレタリアート独裁を断念しなかつたことを、強調する。しかし、現在の状況において、フランス共産党は、主要な任務が、国民的及び国際的、経済的及び政治的反応を拒絶することであることを、考察する。

フランスのケースにおいて、当時のコミンテルンの出版物は、スペインで状況及び諸任務を判断しながら、数カ月後に、非常に率直に表現されるであらう。しかしながら、政府を支持するフランス共産党の諸措置、ストの件について取られたフランス共産党の態度は、状況の評価、諸目標が、スペインのファシスト反乱を解説しながら、アラダール・コムジャト

Aladar Komjath（ハンガリーの共産党員、評論誌の編集者、次いでパリで人民連合の組織者）が書いた問題と同一であることを、指し示す。すなわち、『スペインで、歴史は、議事日程でプロレタリアートの独裁を置かない。そこで、労働者階級の権力のため、プロレタリアートとブルジョワジーの間の闘争であり得ないであろう。闘争において、一方では、プロレタリアート、農民、民主的ブルジョワジー及び知識人たち、他方では、君主封建的反動及び反革命的ファシズムがある…。』（評論誌、一九三六年八月六日、一四三—頁。）

これらの同じ日、出版されたフランス共産党のアピールにおいて、もしもこの理論的な確認でないならば、次の諸路線は、しかしながら、重要である。すなわち、『われわれ、国民の団結を望む、フランスの共産党員たちは、厳かに、あらゆる人民を尊重しながら及び共産党たちと友情で共存しながら、フランスの安全保障、フランスの成功及びフランスの偉大さとは別の目標を持たないように宣言する。』（引用書、一一三四頁。）

コミンテルンの人民戦線の考え方は、その前の数カ月まで、この方向において、第二次世界大戦の勃発を公式化される。与えられた重要性は、人民戦線の内容の及び目的の評価に掛からない、しかし、推移の時期にあるいはその形態に掛かる。すなわち、人々は、ますます、人民戦線を、短い推移、反ファシズムの及び反好戦主義の大衆的運動として思い付いた。『資本主義諸国において、人民戦線の公式化、強化及び闘争は、飢餓の、奴隷の、テロルの及び戦争の諸人民を救済するため、新しい有利な諸条件を創設した。その発展において、この闘争は、不可避に、瀕死の資本主義の転覆に導くであろう。』それは、第七回大会の第三回記念日の時、コミンテルンの理論的雑誌の考え方を要約する。（共産主義インタナショナル、一九三八年、八号、一二二頁。）

人民戦線の目的は、従って変わらなかつた。『瀕死の資本主義の転覆』は、なお後の任務として出現し、しかし、成行き及び単純化された様式は、一九三八年夏、この時期に対して、人民戦線が、具体的な可能性として及び国際的労働運動の戦略上の目標として、全体的性格をもちや戻らないということをも、指し示す。

それは、明白に、一部分は、国際的労働運動の中に、しかし、最初に、ヨーロッパの政治の舞台について、展開された、諸事件の結果であった。第一の領域において、それは、統一戦線の及び最も大きな連合の支持者たちであったし、第二の領域において、それは、退潮の兆しを見せていた、反ファシズムの、民主主義的及び戦争に反対する諸勢力であった。^(五)

社会主義労働者インタナショナルと人民戦線

もしも研究者が、理論的諸態度について及びフランスの諸労働者党の及びコミンテルンの実践的な政策について、人民戦線の分析の時、多数の要因を考慮に入れる義務があるならば、人民戦線と社会主義労働者インタナショナルの諸関係の研究は、もはや容易ではない。彼のインタナショナルの歴史において、社会主義のアプローチの唯一の歴史、ユリウス・ブラウントールは、統一戦線について諸議論で及び社会主義労働者インタナショナルについて諸議論の効果で詳しく話す、しかし、人民戦線についてこのインタナショナルの政策について路線を書かないとしても、奇とするには当たらない。(ユリウス・ブラウントール、インタナショナルの歴史、二巻、J・H・W・デイツ出版社、照会。ボンベルリン有限会社、一九七八年三月。版。四九一―五二四頁。)それは、人民戦線の評価を含む、『フランスで統一戦線と人民戦線』という標題を付けられた章である。そこに、人民戦線の及び同時に、大きく、フランスの及びソヴェエトの政治の諸党及び諸集団が、問題になっている。問題になっていない、単に事柄である。すなわち、社会主義労働者インタナショナルの態度。そして、奇とするには当たらない。

一九三三年から―社会主義労働者インタナショナルの有効な支持の要素であった、ドイツの社会民主主義の崩壊―、統一戦線に反対する、右翼が、単に行動統一に反対したばかりでなく、共産党員たちが、参加者たちとして出現することはできた、すべての同盟に反対したことは、かなり有名である。それから、実は、問題になっただけでなく、フリードリッ

ヒリアドラー、ルイスロッドウブルケール—それぞれ書記及び当時の組織議長—は、強化された「対話」があつたことを手に入れることはできなかつた、インタナショナルの『民主的諸基礎』、コミンテルンと組織的諸情報の諸相談ではなかつた。

すべてそれは、アドラーとインタナショナルの会計係、ヴァンロースブロック Van Roosbroek が、加わる、ドゥブルケールの辞職によつて、一九三三年六月で極まる、社会主義労働者インタナショナルの内部の危機を証明する。危機の要点は、当然、統一戦線に対してあるいは人民戦線に対して敵意ではなかつた、しかし、諸矛盾の効果で、インタナショナルの諸特徴になつた、そして諸矛盾に、アドラーに送付された彼の手紙において、ドゥブルケールが、参照した、行動するような受動性、無能力であつた。ドゥブルケールの六月一八日の手紙とアドラーの六月二〇日の日付を書かれたノート（国際的自由社会労働組合 I L S G 社会主義労働者インタナショナル S A I、行政権、四九〇、一一二、七一八。）は、わずかの時間だけ、インタナショナルを揺り動かした。すなわち、スペインの及びフランスの社会党員たちの側に、スカンディナヴィアの及びオランダの諸党は、やはり辞職に反対して態度を決めた。しかし、この瞬間は、決して長続きしなかつた。すなわち、一九三七年六月でアママスの交渉後、コミンテルンの代表者たちと、右翼—そのスポークスマンたちは、イギリスの、スカンディナヴィアのの、オランダの及び一部分はチエコスロヴァキアの諸党である—は、再び結合される。

人民戦線について社会主義労働者インタナショナルの態度が、右翼によつて影響を及ぼされたことは、議論の余地がないのに、左翼によつて前進された諸議論をなおざりにする必要がない。諸議論の大部分は、コミンテルン第七回大会に対して、おうむ返しに、大会で知られた『新しい路線』に対して活気づけられた。批判の要点は、社会党の左翼が、コミンテルンが、人民戦線政策によつて、社会主義革命を放棄した、そして、単にブルジョワ民主主義の保護の下に、諸態度を手に入れるように努めたことを評価したということであつた。それは、ドイツの『新規時き直し』—諸グループ及び革命的社会党員たち、すなわち、ベルギー党の左翼、反戦国際的連盟、アメリカ社会党及びなおもつと厳格にイギリス独立

労働党が、公言した問題である。(もっと詳細に、ヴァイリッブユシヤーク Willi Buschak 『ヨーロッパの左翼の社会党員たちとコミンテルン第七回大会』を参照、コミンテルン第七回大会、六二—六七頁、の中に。)

他方では、社会党の左翼は、人民戦線と一緒に、共産主義運動が、その運動の主体性を断絶しないように恐れた。そして、『革命的左翼』誌の一九三五年一〇月二〇日の号において、ボリス・ゴルデンベルグ Boris Goldenberg (別の名、ボリス・ジルベルト Boris Gilbert) は、それを書いたように、すなわち、『彼らは、革命的民族主義のサラダによってインタナショナルを取り替えたし、諸階級の協力を承認する…。』、次いで、彼は、挫折した、ドイツの社会民主主義政策をほのめかし、続ける。すなわち、『権力を獲得する代わりに、彼らは、より小さな害悪』の政策、ブルジョワ民主主義の防衛を採択する。』

左翼の最も過激化の定式化は、マルクス主義統一労働者党 P O U M から由来する。すなわち、『コミンテルン第七回大会は、インタナショナルの全体的解決及び同様に共産主義運動の解決を表現する。彼らは、すべての社会党の展望を否定した。』(D I I I カテル D. T. Cattal、共産主義とスペイン内戦。バークレイ、一九五五年、一二頁。すなわち、ジルバート、『コミンテルン第七回大会に関する幾らかの考察。革命的左翼、一九三五年一月二〇日。』、すなわち、何がマルクス主義統一労働者党であるか、そして望むか。バルセロナ、一九三六年、二七頁。プシヤーク、前掲書、六五—六七頁によって引用された。)

明らかに、穏健な『左翼』は、社会主義労働者インタナショナルにおいて、諸集団、特に、単に諸集団の道徳的比重を持つたばかりでなく、人民戦線の必要を承認した、そして必要を実現した、フランスの、スペインの及びイタリアの諸社会党よりよくもっと大きな効果を挑発した。これらの関係から、すなわち、諸関係の政策の解釈から、実は、人々は、インタナショナルの態度をよりよく知っていることができる。

社会主義労働者インタナショナルの及び人民戦線の諸関係は、フランスの人民戦線の一九三六年一月の綱領の出版物によってマークされる。この綱領は、短い序論で、一月一七日の彼の号において、国際的情報誌という、社会主義労働者イ

インタナショナルの書記局によって出版された。コミンテルンの機関誌、インプレコール（国際的通信誌）において同様に、序論は、人民戦線に加わつた、最も重要な諸組織を言及する、列挙で始まる。それは、しかしながら、人民戦線の、資料自体の、全体の彼の性格の現実の重要性を内輪で見積る、パラグラフによって注意される。次のパラグラフは、ル・ポ、ピユール紙において出版された、レオン・ブルムの宣言の一部分を引用し、人民戦線綱領が、『第二回のトゥールの綱領、将来の多数派の共同綱領、政府の綱領』である、この主題について表明する。資料の出版物は、分析の論文に、同時に、人民戦線を先行する時期に対して参照に伴っていない。次の論文は、この同じ主題を取り扱かう、そして、多分諸解説の欠如を覆い隠すことを望むとしても、多分奇とするには当たらない。論文は、『統一戦線及び人民戦線に反対するベルギー労働者党』という、標題を付けられる。（国際的情報誌、一九三六年一月一七日、二二—二三頁。）

要点のため、論文は、四五票対四票及び六票の棄権で、決議が、表題によって指示された方向において、採択された、ベルギー労働者党の上級会議の一月七日の会期のコミニケである。論文の利害は、論文が、続いて起ころ、時期の同じ様式の諸文書の主な諸特徴を含むことである。すなわち、論文は、記述的である。むしろ報告は、すべての解説を差し控える、すなわち、人々が、社会主義労働者インタナショナルの書記局の一種の共同の意見のため、定着することはできなかったであろう、態度にどれもほめかさない。しかし、論文は、ベルギーの決議が作成する、そして次の数カ月において、範を示すであろう、意味において、諸解説を取り替える。すなわち、人民戦線の原則を拒否しないで、論文は、『諸条件が、すべて違っている』、諸国の実例を注意するように、『用心する。』二つの文章は、しかし、ますますそれについて言う。第一の文章、すなわち、『それは、民主主義的自由の諸権利及び平和の防衛によって繰り広げられた闘争において、あらゆる労働者たち及びプロレタリアたちの団結の核である、労働者党である、そして、その党を残っているであろう。』そして、第二の文章、すなわち、『単に、あらゆるプロレタリアの諸勢力の小さな少数派を代表する、結果として、政治的諸組織に対して党の団結を持つことはできる、すべての同じ一時的な団結に反対して態度を決めること。』（国際的情報誌、

一九三六年一月十七日、二二—二三頁。

それは、この資料が、ベルギーで編集されたということは、偶然にはない。急速な編集は、一部分は、フランスの人民戦線の近さによって、ベルギー労働者党の役割によって、そしてなおもつと、彼の指導者たちが、社会主義労働者インタナショナルの指導部において演じた（ヴァンデルヴェルデ、ドゥーブルケール）、役割によって、説明される。それは、同様に返事を決定する、この二重の側面である。すなわち、何よりも先ず、共産党に直面して、国民的基礎について控え目、そして、他の国々のケースにおいて、しばしばソ同盟の比重の認識が、そして、ソ同盟を横切つて、コミンテルンの及びある諸共産党の認識が、その後ろに見出された、『受諾』。

要するに、それは、多数派の態度として考えられることはできる、そして、執行委員会の一九三六年五月一六日から一八日まで、そしてその後、会期に打ち勝つた、このこの態度である。それは、ある諸党のケースにおいて、人々が人民戦線への参加を非難すべきものとして考えなかつたであろうことは、言うことを希望した。そして、もしも諸党が、人民戦線の性格の国際的諸組織の諸仕事に参加するか参加しないことを希望したならば、諸党は、それら自体に決定することは、同時に正当と認められた。（人民戦線への参加の支持が、実際、公開状の後に、起こつたのに、国際的組織における統合（具体的に、そこで、平和のための世界的連合の準備として、大会が問題であつた）は、先行すべきであつたことは、多分注意する必要がある。すなわち、それは、五月一五日のその会期に対して、実は、社会主義労働者インタナショナルの事務局は、会期を承認した。一九三六年五月三日の、国際的情報誌、一六〇頁。国際的自由社会労働組合 社会主義労働者インタナショナル、執行権、四七一—一〇。）

この態度は、同時に、社会主義労働者インタナショナルが、全体の考え方あるいは全体の政治的現象の資格で、人民戦線の分析及び研究の資料を決して採択しなかつたことは、意味した。執行委員会の書記局は、彼の新聞において、人民戦線に賛成してあるいは反対して議論する、多様な党の諸資料を出版し続けた、しかし、凌駕しなかつた。社会主義労働者インタナショナルの指導者たち、とりわけ、ドゥーブルケール、ヴァンデルヴェルデ及びアドラーは、この性格の態度が、

単に、ますますインタナショナルの開かれた危機を深まるように続けられたであろうことは、正確に知っていた。その指導者たちは、単に、コミンテルンと交渉において、スカンディナヴィアの及びイギリスの諸党によって、率直に叫ばれた脅威を、諸党の組織によって、インタナショナルの放棄でばかりでなく、すでに引用された『左翼』の反議論で考えられる義務があつた。（一九三六年のそれらの号において、国際情報誌は、フランスの党の態度の側に、スペインの、アルゼンチンの、ブルガリアの、イギリスの、ギリシャの、ユーゴスラヴィアの、カナダの及びウルグアイの諸党の諸態度を知らせて、人民戦線のテーマに対して、一三条を公表する。一九三七年で、はっきりと人民戦線という性格の諸論文の数は、少し減る、これに反して、われわれは、同様に、イタリアの及びポーランドの諸資料を発見する。）

人々は、なお、その間に、デンマーク社会民主党が、一九三五年三月で、アンケートの問題に答えながら、その指導者たちが、戦争の場合には、社会主義労働者インタナショナルの政策について、彼らの態度をさらした時、社会主義労働者インタナショナル書記局の注意を引き付けた、状況を考慮に入れる義務があつた。すなわち、『この手段によって（すなわち、共同の諸指令を受け入れること—ガボルツェクリ）、われわれは、ただ、社会主義労働者インタナショナルの諸党が、実現する能力がないであろう、ということ、主張を公式化するように手に入れるであろう。われわれは、現在の状況ある他の似たものにおいて、社会主義労働者インタナショナルが、決定的な影響力を自由にするであろう、そして、従つて、特別の責任を持つであろうことを、社会主義労働者インタナショナルは、間違う、信じさせる積りでないことは、考えている。』（フリードリッヒ・エベルト・ステイフトゥング Friedrich Ebert Stiftung。ゾパ、デー、ドイツ社会民主党、（ブラハ、亡命指導部、移民。一般的情報誌。ファイイル二二六。社会主義労働者インタナショナル。諸戦争の間に、インタナショナルの射撃位置の問題について、デンマークの社会民主主義の論評。一—三。）

この意味において、最もしっかりした資料は、行動統一の起こり得る協定に反対して、書いた、ヘット・ヴォルク、*Der Volk* の一九三七年六月一七日の号において、オランダ人ジョハン・ウィレム・アルバルダ Johan Willem Albarða の論文

であった。すなわち、『オランダ社会民主主義労働者党は、大変残念なことに、このケースにおいて、社会主義労働者インタナショナルを離れるように必要なものとして考察したであろう、唯一の党ではないであろう。』（国際的自由社会労働組合 社会労働者インタナショナル、行政権、五九五。四〇―四一）。

あらゆるこれらの事態は、人民戦線の問題に関して、社会主義労働者インタナショナルの指導部の留保を説明し、スペイン共和国の防衛の利害において、次いで、ミュンヘン協定の名に対して、戦争の及びファシズムの危険の際に、広範な連合の可能性を探し求めないことを、しかし、いわゆる平行した、もつと制限された諸行動で満足することを、彼の諦めを説明する。社会主義労働者インタナショナルの議長、ドウリブルケールのように、組織の指導者たちの間に、ある人々は、徹底的に、人民戦線の諸組織に対して参加したし、この最後の人民戦線の影響力に対して、繰り返して、社会主義労働者インタナショナル事務局の諸集会に対して議論したことは、注目する必要がある。（彼は、組織の国際的書記として及びアムステルダム・ブレイエル世界委員会のメンバーとして、平和のための世界的連合の一九三九年五月一三―一五日のパリの会議に参加した。クラルテ（光）誌、一九三九年六月、一三二―一三六三頁。）

社会主義労働者インタナショナル書記、アドラーと同様に、他の指導者たちは、最初に、一九三九年五月で、世界大戦の勃発の前、悲しい最後の結果を確認するため、行動することを無能に反対して、そして、国民的あるいは国際的結集の欠如に反対して、闘った。すなわち、『決して、真に、国際主義に信用していなかった、懐疑的な人たちは、初めから、それは、正しかった懐疑的な人たちであることを、今日、確認することはできる。』（彼は、社会主義労働者インタナショナル執行委員会の一九三九年五月一四―一五日の会期の後、単なる情報的事務局の中に、インタナショナルの変化に反対して抗議する、諸党に送付した、アドラーのメモの抜粋。国際的自由社会労働組合 社会主義労働者インタナショナル、事務局、六八八。一―七。）

人民戦線の及び労働運動の政策について、二つの国際的組織の諸関係の歴史は、なお、疑いもなく、他の諸研究を要求する。いずれにしても、現実に脅やかす（戦争とファシズム）、承認ずみの危険に反対して、連合の受諾が、結集

へ参加したあらゆる諸勢力、すなわち、諸政党、諸労働組合、諸集団を強化したことは、現実にはわれわれの傾向に対して、原資料から生じる。それに反対して、連合の目標の誤った解釈、彼らの可能性の、過大であるいは過小——評価は、弱点を引き起こした。なお、もっと重大な諸結果を引きずりこんだ問題、歴史によつて要求された返答の後に後退、すなわち、人民戦線の国際化の受諾。その結果は、国際的労働運動の行動統一が、起こらなかつた、そして、その結果として、人民戦線が、孤立した、労働運動が、内部に弱まった、そして、彼の外部の明るい発現、その味方たちの陣営が、衰えたということになった。すべてのそれを考慮に入れて、フランスの（そして、当然、スペインの）諸人民戦線は、それらの固有な過失もしくは弱点の理由で、失敗しなかつたことは、疑う余地はない。すなわち、諸人民戦線は、敵対者たちが、諸勢力の重要なヘゲモニーを自由にした、諸闘争に参加するように義務を課した。^(七)

フランスで人民戦線に直面して、コミンテルンは、単に、漸次及び矛盾して、事実上の、義務的な行動の何の綱領を定義しないで、態度を決した。彼の指導者たちのある人々にもかわらず、彼の右翼の敵意によつて麻痺された、社会主義労働者インタナショナルに関して、コミンテルンが、その全体において、人民戦線の考え方もしくは現象について、何の資料を採択しなかつたと同様に、コミンテルンは、フランスの人民戦線を考慮して、はつきりと態度を決めるように、常に差し控えた。彼の国際化を妨げるのに貢献した、行動を差し控えること。^(八)

——一九九一—六一—一五、成稿——

(1) Cf. Malcolm Sylvers, *Etats-Uns: Front populaire et Syndicalisation de masse*, in: *Cahiers d'histoire de l'Institut de recherches marxistes*, Sommaire n°27 (1987), pp. 97-102. 久保文明『ニューデールとアメリカ民主政——農業政策をめぐる政治過程——』東京大学出版会、一九八八年、土生芳人『大恐慌とニューデール財政』同、一九八九年、秋元英一『ニューデールとアメリカ資本主義——民衆運動史の観点から——』同、同年、William Z. Foster, *Outline history of the world trade union movement*, International publishers, New York, 1956. W・Z・フォスター、塩田庄兵衛他訳『世界労働組合運動史 上巻』下巻』大月書店、一九五七年、参照、等。

(11) Cf. *Ibid.*, pp. 102-108

- (三) Cf. *Ibid.*, pp. 108-114.
- (四) Cf. *Ibid.*, pp. 114-122.
- (五) Cf. *Ibid.*, pp. 3, 4.
- (六) Cf. Gabor Székely, *Le Komintern, l'Internationale ouvrière socialiste et le Front populaire français*, in: *CHRM*, n°27, 1987, pp. 123-130, 135-136. Maurice Thorez, *Fils du peuple*, Editions Sociales, Paris, 1970. モリス・トノース「北原道彦訳『人民の子』大月書店一九七八年。Claude Willard, Jacques Chambaz, Jean Bruhat, Georges Cognot et Claude Gindin, *Le Front populaire (La France de 1934 à 1939)*, Editions Sociales, 1972. 拙著『フランス人民戦線論史序説』『フランス人民戦線政府論』『ロミンテルン』法律文化社、一九七七年、J・ブラウントール、上条勇訳『社会主義の第三の道』梓出版社、一九九〇年参照、等。
- (七) Cf. *Ibid.*, pp. 130-134, 136.
- (八) Cf. *Ibid.*, pp. 3, 4.

付記

- (一) 主要参考外国文献は、Cf. Pierre Mandes France, *Oeuvres complètes, Tome I, S'engager 1922-1943*, Editions Gallimard, 1984, Claude Quin, *Idees neuves pour sociétés en crise*, Editions Sociales, Paris, 1990, Georges Marchais, *Democratie*, Editions Sociales, Paris, 1990, 1920-1990, *Le parti communiste de notre temps*, in: *Cahiers du communisme*, 1990, etc. による。
- (二) 筆者は、今年「CRHMSS, Université de Paris I, Bulletin n°14, 1991」をまだ奇贈されていない。外国で八二二種、国内で六二五種合計一、四四六種である。(九一一六一一五、現在。)